

YOSI ZUKA HON MACHI

吉塚本町遺跡 1

—吉塚本町遺跡第1次調査報告書—



1993

福岡市教育委員会

YOSI ZUKA HON MACHI

吉塚本町遺跡 1

—吉塚本町遺跡第1次調査報告書—



1993

福岡市教育委員会



吉塚本町遺跡第1次調査地点全景

序

「活力あるアジアの拠点都市」を目指して都市づくりを進める福岡市は、古くから我が国と大陸との主要な窓口でした。その中でも福岡平野は、弥生時代には「漢委奴国王」の金印に記された「奴国」が存在し、それ以後も対外交渉の拠点として重要な位置にあり、数々の貴重な遺跡が残されています。

しかし、近年の福岡市の著しい都市化により、それらが次第に失われつつあります。福岡市教育委員会では、それらの開発によって失われていく遺跡については事前に発掘調査を行い、記録の保存に努めています。

本書は博多区吉塚本町の住宅・都市整備公団の住宅建設に伴い、平成2年度に発掘調査した吉塚本町遺跡の調査成果を報告するものです。この調査では弥生時代から奈良時代にかけての遺構・遺物が発見され、当時の集落での生活の一端を垣間見ることができました。

本書を通じて市民の皆様が埋蔵文化財への理解と認識を深め、歴史を身近に感じていただくことになれば幸いです。

最後に発掘調査に当たり数々のご協力いただいた住宅・都市整備公団ならびに地元の方々に厚くお礼申し上げます。

平成5年1月

福岡市教育委員会

教育長 井 口 雄 哉

例　　言

1. 本書は住宅都市整備公団の住宅建設に先立ち、福岡市教育委員会が平成2年8月20日～12月27日に調査を実施した、吉塚本町遺跡第1次調査の報告書である。
2. 吉塚本町遺跡は1980年発行の『福岡市文化財分布地図(中部・南部)』にある堅粕遺跡群の隣接地にあたるが、遺跡の範囲には含まれていなかった。今回の調査にあたって新設された遺跡群である。
3. 本書に使用した遺構の実測は常松幹雄、菅波正人、塚副義一郎、大橋善平が行った。遺物の実測は常松、菅波、衛藤美奈子が行った。製図は林田憲三、英豪之、境靖紀が行った。
4. 本書に使用した遺構、遺物の写真は常松、菅波が撮影した。空撮は南空中写真企画が行った。
5. 本書に使用した方位は磁北である。また、実測図の断面黒ヌリは須恵器を表す。
6. 遺構の呼称は記号化し、掘立柱建物跡→SB、竪穴住居跡→SC、土坑→SKとしている。遺構番号は検出順にⅠ桁の番号を付け、Ⅱ区については200番台から始めている。
7. 本書の執筆は第3章-6を常松が、その他を菅波が行った。
8. 編集は常松と協議の上、菅波が行った。
9. 本報告に係わる図面、写真、遺物はすべて福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される予定である。

本文目次

本文貢

第1章 はじめに.....	1
1. 調査に至る経緯.....	1
2. 調査の組織.....	2
第2章 遺跡の立地と歴史的環境.....	3
1. 遺跡の立地と周辺の遺跡.....	3
2. 概往の調査.....	3
第3章 調査の記録.....	5
1. 調査の概要.....	5
1) 遺跡の立地.....	5
2) 調査の経過.....	5
3) 遺構、遺物の概要.....	6
2. 掘立柱建物跡(SB).....	8
3. 積穴住居跡(SC).....	8
4. 土坑(SK).....	20
5. 包含層出土遺物.....	40
6. 駅弁と考古学.....	45
第4章 まとめ.....	54

挿 図 目 次

本文頁

Fig. 1	吉塚本町遺跡第1～3次調査地点位置図 (1/5000)	1
Fig. 2	吉塚本町遺跡群と周辺の遺跡 (1/50000)	4
Fig. 3	吉塚本町遺跡第1次、3次調査地点位置図 (1/1000)	5
Fig. 4	吉塚本町遺跡第1次地点遺構配置図 (1/200)	折り込み
Fig. 5	SB-0111遺構実測図 (1/60)	8
Fig. 6	SC-0001遺構実測図 (1/40)	10
Fig. 7	SC-0008遺構実測図 (1/40)	11
Fig. 8	竪穴住居跡出土遺物実測図1 (1/3、1/2)	12
Fig. 9	SC-0024遺構実測図 (1/40)	13
Fig. 10	SC-0039遺構実測図 (1/40)	15
Fig. 11	竪穴住居跡出土遺物実測図2 (1/3、1/2)	16
Fig. 12	SC-0041遺構実測図 (1/40)	17
Fig. 13	SC-0044遺構実測図 (1/40)	18
Fig. 14	竪穴住居跡出土遺物実測図3 (1/3、1/2)	19
Fig. 15	SK-0002、0003遺構実測図 (1/40)	21
Fig. 16	SK-0006、0007、0016遺構実測図 (1/40)	22
Fig. 17	土坑出土遺物実測図1 (1/3)	23
Fig. 18	SK-0023、0031、0025遺構実測図 (1/40)	25
Fig. 19	土坑出土遺物実測図2 (1/3)	26
Fig. 20	SK-0032、0040遺構実測図 (1/40)	27
Fig. 21	土坑出土遺物実測図3 (1/3)	29
Fig. 22	SK-0029、0049遺構実測図 (1/40)	30
Fig. 23	土坑出土遺物実測図4 (1/3)	32
Fig. 24	SK-0054、0055、0062、0082、0091遺構実測図 (1/40)	34
Fig. 25	土坑出土遺物実測図5 (1/3)	35
Fig. 26	土坑出土遺物実測図6 (1/3)	37
Fig. 27	土坑出土土鍾実測図7 (1/3)	39
Fig. 28	包含層出土遺物実測図1 (1/3)	41
Fig. 29	包含層出土遺物実測図2 (1/3)	42
Fig. 30	包含層出土遺物実測図3 (1/3、1/2)	43

Fig. 31 「キ」無し瓶にみられるゴム印	47
Fig. 32 駅弁関係容器 1 (1/3)	49
Fig. 33 駅弁関係容器 2 (1/3)	50
Fig. 34 駅弁関係容器 3 (1/3)	51
Fig. 35 駅弁関係容器 4 (1/3)	52
Fig. 36 「チャイ」の容器 (1/3)	53

図 版 目 次

巻頭図版 古塚本町遺跡第1次調査地点全景

- PL. 1 1. 第2次、3次調査地点遠景（南から）
2. 第1次調査地点全景（北から）
- PL. 2 1. 第1次調査地点Ⅰ区北側全景（東から）
2. 第1次調査地点Ⅰ区南側全景（東から）
- PL. 3 1. 第1次調査地点Ⅱ区全景（北から）
2. 第1次調査地点Ⅱ区全景（南から）
- PL. 4 1. 作業風景（東から）
2. SB-0111完掘（東から）
- PL. 5 1. SC-0001、0024、SK-0002完掘（東から）
2. SC-0001完掘（南から）
- PL. 6 1. SC-0024、SK-0002完掘（東から）
2. SC-0039完掘（北から）
- PL. 7 1. SC-0041完掘（北から）
2. SK-0003完掘（西から）
- PL. 8 1. SK-0005完掘（西から）
2. SK-0006、0007完掘（西から）
- PL. 9 1. SK-0025完掘（東から）
2. SK-0040完掘（東から）
- PL. 10 1. SK-0055完掘（東から）
2. SK-0055遺物出土状況（東から）
- PL. 11 1. Ⅱ区西側包含層出土銅鏡（南から）
2. Ⅱ区駅弁用茶瓶廐棄坑（南から）
- PL. 12 1. 出土遺物
弥生土器・土師器

- PL. 13 1. 出土遺物
須恵器・製塙土器・陶磁器
- PL. 14 1. 出土遺物
石鍤・土鍤・銅鑼・駅弁関係
- PL. 15 1. 出土遺物
駅弁関係
- PL. 16 1. 出土遺物 駅弁関係
2. 出土遺物 駅弁関係

表 目 次

本文頁

Tab. 1	堅穴住居跡出土土鍤一覧表.....	18
Tab. 2	土坑出土土鍤一覧表.....	39
Tab. 3	包含層出土土鍤一覧表.....	44
Tab. 4	土壤出土遺物の器種構成、「き」なし瓶のゴム印種別構成.....	46

第1章 はじめに

1. 調査に至る経緯

平成2年度、博多区吉塚本町130-6における住宅建設に先立ち、住宅都市整備公団から埋蔵文化財課に埋蔵文化財の有無の照会があった。当該地は旧国鉄操車場跡で、1980年発行の文化財分布地図（中部・南部）には遺跡の範囲に含まれていなかった。しかし、隣接地では堅粕遺跡群、吉塚遺跡群等の遺跡が知られており、当該地での遺跡の存在が予想され、平成2年度5月、6月に試掘調査を行った。その結果、地表下1.0~1.3mの白色砂層上面で竪穴住居跡、土坑と考えられる遺構と共に弥生土器、土師器、須恵器等の遺物を検出した。その成果を基に埋蔵文化財課は住宅都市整備公団と協議をもち、記録保存のための発掘調査を行うこととなった。調査に際して、当該地で見られた遺構は更に北・西に広がりを示していることから、この一帯

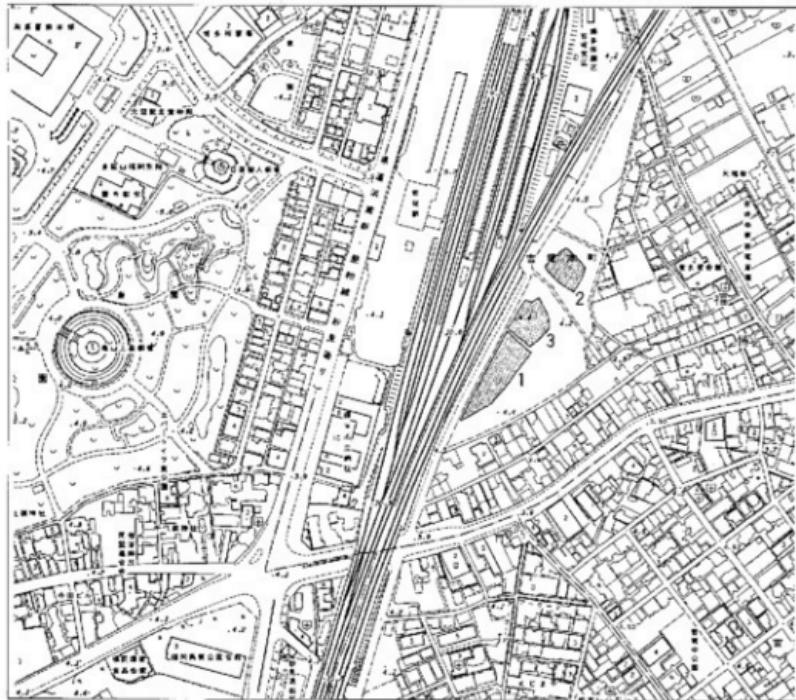


Fig. 1 吉塚本町遺跡第1～3次調査地点位置図 (1/5,000)

を吉塚本町遺跡として新設した。そして、今回の調査を第1次調査として、平成2年8月20日～12月27日に実施した。

2. 調査の組織

調査は以下に示す組織構成で実施した。調査にあたって、住宅都市整備公団ならびに関係各位には調査費用をはじめとして、条件整備等で多大なるご協力を頂いた。また、調査中は周辺の住民の皆様には騒音、砂塵等で多大なるご迷惑をかけたが、皆様のご理解とご協力により調査を無事行うことができた。ここに記して謝意を表する。

調査委託	住宅都市整備公団		
調査主体	福岡市教育委員会 教育長	井口雄哉	
	埋蔵文化財課長	柳田純孝（前任）	折尾学
	埋蔵文化財第二係長	柳沢一男（前任）	塙屋勝利
調査庶務	埋蔵文化財第一係	松延好文（前任）	寺崎幸男
調査担当	常松幹雄 曹波正人		
調査作業	石松晋 内野弘行 扇貞雄 大橋善平 岡崇 小田和芳 海堀誠治 金沢孝弘 熊本伸真 真田弘二 新名好 高野浩二 楠良平 田才文哉 塚副義一郎 広田熊雄 藤尾薰 松岡大介 柳沢竜広 吉住作美 荒巻記子 池田由美 石橋テル子 川上すぎえ 窪田慧 小城信子 黒木美代子 黒木雅子 香野シゲ 高島ハル子 武田潤子 矢知知子 藤信子 中村フミ子 長野由利 永松伊都子 平野徳子 宮坂環 宮崎芳子 村田トモヨ 森山キヨ子 安田光代 山崎美枝子 脇山喜代子		
整理補助	林田憲三 黒田和生 英豪之		
整理作業	有島美江 衛藤美奈子 太田順子 緒方まきよ		

なお、調査、整理にあたって、井上裕弘、磯望、大川清、下山正一諸氏に貴重なご教示をいただきいた。記して、感謝の意を表したい。

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

1. 遺跡の立地と周辺の遺跡

福岡市の大部分を占める福岡平野は南北に延びる洪積丘陵と沖積平野からなり、北は博多湾に面し、東から南にかけて三郡、背振山塊に囲まれる。平野内には東から多々良川、御笠川、那珂川、樋井川、室見川が貫流し、それぞれの河川に開析された丘陵や段丘によって画された小平野が形成される。狹義の福岡平野はその小平野の一つで、御笠川、那珂川流域の旧席田郡の一部、那珂郡、御笠郡を指している。

吉塚本町遺跡は御笠川と多々良川の支流である宇美川に挟まれた標高3~4mの砂丘上に立地する。本遺跡を含めて、周辺には砂丘上に立地する遺跡が分布する。北側の箱崎遺跡では11世紀~15世紀にわたる遺跡で、第2次調査では江戸時代の菅崎宮の絵図に描かれている「赤幡坊」の建物跡と推定される遺構など検出されている。南側の堅船遺跡群は弥生時代から中世にわたる遺跡で、第1次調査では貨泉が包含層から検出されている。古代の遺構では第3次調査で縁軸の小蓋を副葬した木棺墓が検出されている。その東側に位置する吉塚遺跡群でも貨泉をはじめ、弥生時代から中世にかけての遺構遺物が多数検出されている。更に南にある博多遺跡は弥生時代前期に始まり、河口部の陸地化によって次第に遺跡が拡大している。現在まで80次を越える調査が行われて、古代、中世を通じて対外交渉の拠点であったことを示す多数の遺構、遺物が検出されている。

2. 既往の調査

吉塚本町遺跡は平成4年度現在、3次の調査が行われた。整理の都合等で報告が前後しているが、これまでの調査成果を概述する。

第1次調査（今回報告分、調査期間1990年8月20日~12月27日、調査面積2380m²）

第2次調査（1993年報告、調査期間1991年9月5日~12月7日、調査面積1900m²）

市道建設に伴って実施された調査で、本調査区の北側の砂丘の突端に位置する。調査では旧国鉄時代のプラットホーム等近、現代の遺構が検出された。遺物では弥生土器、土師器、須恵器等と共に縄文土器が検出された。砂丘形成時の遺物として注目される。

第3次調査（県教委1992年報告、調査期間1991年9月18日~12月27日、調査面積約850m²）

第1次調査地点の北側の隣接地で、古墳時代~奈良時代の遺構、遺物が多数検出された。



- | | | | |
|------------|-------------------|------------|------------|
| 1. 桑多遺跡群 | 7. 梶野遺跡群 | 13. 井尻遺跡群 | 19. 五日山遺跡 |
| 2. 稲荷城 | 8. 芳利深谷分道及、野河君生遺跡 | 14. 丹化遺跡群 | 20. 三石龜寺 |
| 3. 鎌足遺跡群 | 9. 堀川遺跡 | 15. 仙波遺跡群 | 21. 野多日遺跡 |
| 4. 吉塚本町遺跡群 | 10. 萩岡遺跡 | 16. 田代水口遺跡 | 22. 野多日笠遺跡 |
| 5. 六坂古跡群 | 11. 家柄遺跡 | 17. 田代岡本遺跡 | |
| 6. 北堀遺跡群 | 12. 五十嵐森木遺跡 | | |

Fig. 2 吉塚本町遺跡群と周辺の遺跡 (1/50,000)

第3章 調査の記録

1. 調査の概要

1) 遺跡の立地

当該地は昭和40年前後まで吉塚操車場があった場所で、その施設建設時の基礎やゴミ穴のため、かなりの擾乱を受けていた。試掘調査の成果によると、遺構面は地表下1.0~1.3mの黄白色砂層で、東側に向かうにつれて傾斜していき、調査区東側の試掘トレンチでは地表下2.5~3mの谷部となっている。現地の踏査をされた九州大学理学部下山正一先生、西南学院大学磯望先生の地質分析図によると、この砂層は箱崎砂層と呼ばれる上面の中砂で、形成時期はB.P. 2500~3000年頃といわれている。

2) 調査の経過

調査は試掘の成果を基に申請地の東側を除く2380m²の部分について行った。調査は重機で、地表下1.0~1.3mの造成土を除去した後に行った。残土は調査後の工事工程から調査区外に持ち出せなかっただため、調査区を2区に分けて残土を反転する事によって対処した。

造成土を除去すると、黄褐色砂の包含層を検出した。包含層は古墳~奈良時代の遺物を含むもので厚さ10~30cm程である。包含層上面では近、現代の遺構を除いてほとんど遺構を確認す



Fig. 3 吉塚本町遺跡第1次、3次調査地点位置図 (1/1,000)

ることができなかつたので、包含層の下層の黄白色砂で遺構検出作業を行つた。遺構面の標高は約3.0~3.5mを測る。

3) 遺構、遺物の概要

遺構は近、現代の攪乱のため、遺存状況は良くない。遺構は弥生時代後期~奈良時代にかけての掘立柱建物跡1棟、竪穴住居跡・軒、土坑・基、溝1条等を検出した。遺構は全域で検出したが、更に西側と南側に分布は広がるものと考えられる。この他、近、現代の遺構として旧国鉄操車場時代の基礎、駅弁用の茶瓶、湯呑み茶碗等の廃棄坑、井戸等を検出した。昭和30年頃の操車場の施設配置図を見ると、本調査区には引き込み線と倉庫が存在していたことが分かる。調査区南側で検出された基礎はその倉庫のものと考えられる。

遺物は弥生土器、土師器、須恵器等の弥生時代後期~奈良時代にかけての土器を中心に、土錘、石錘、製塙土器等の生産関連遺物、銅鏡等を検出した。遺物の出土状況を見ると、古墳~奈良時代の遺物は調査区全域で見られたが、弥生時代の遺物は調査区南側に集中している。北側で行われた県教育委員会の調査でも弥生時代の遺物は少なく、本調査区南側に該期の遺構の広がりが予想される。この他、越州窯系青磁、白磁、黒色土器等、古代末~中世の遺物も量は少ないが出土している。近代の遺物としては駅弁用の茶瓶と湯呑みのセットやうなぎめし用の碗、牛乳瓶やビール瓶等、操車場跡ならではの遺物が出土している。



調査区全景（南から）



Fig. 4 吉塚本町遺跡第1次地点遺構配置図 (1/200)

吉塚本町地質柱状図

標 尺 m	標 高 m	深 度 m	層 厚 m	層 色 調	地 質 名	観察記事	土 層 名 質		年 代
							性 質	年 代	
1	3.68	0.50	0.50	暗灰	盛土	焼却残土である。	風化層	3,000 5 2,500BP	
	2.68	1.50	1.00	暗黄褐	中砂	粒子は不均一である。 雲母片を少量含む。			
2	1.68	2.50	1.00	黃褐	粗砂	粒子は不均一である。 雲母片を少量含む。	河口域河川性の 砂層	3,000 5 2,500BP	
3				暗黄褐	砂混り中砂	粒子は不均一である。 礫は約2~3mm程度の亜鉛礫である。			
4	-0.32	4.50	2.00						
5	-1.32	5.50	1.00	褐	細砂	粗粒分を多く含む。	複合層 内浦シルト層	6,000 5 3,000? BP	
6				暗灰	シルト混り 細砂	粗粒分を多く含む。 貝殻片を混入する。			
7	-3.32	7.50	2.00						
8				暗灰	シルト混り 粗砂	粒子は不均一である。 約2~6mm程度の中粒礫が点在する。	住吉層 三妙角積洲物	10,000BP	
9	-5.32	9.50	2.00			礫は約2~3mm程度の亜鉛礫である。 色調は11m付近より淡褐色を呈する。			
10				暗灰 淡灰	鐵混り粗砂		大坪砂礫層	段	
11	-7.32	11.50	2.00						
12	-6.32	12.50	1.00	暗褐	シルト混り 粗砂	粒子は不均一である。 約2~3mm程度の中粒礫が点在する。	須崎層	丘	
13				暗緑褐	鐵混り粗砂	礫は約2~40mm程度の亜鉛礫である。 少量のシルト分を含む所がある。			
14	-10.42	14.60	2.10						
	10.67	14.60	0.25	黃褐	砂	礫径は約20~40mm程度である。同化土。			
15									
16						上部は風化が著しく、粘土化している所もある。	花崗マサ土	マサ土	
17				暗緑灰	マサ土	下部は砂状を呈するが、よく締まっている。			
18						色調は、23m付近から淡緑灰を呈する。			
19									
20									

2. 掘立柱建物跡 (SB)

今回の調査では多数の柱穴を検出したが、建物として復元できたのは1棟である。

SB-0111 (Fig. 5)

調査区中央に位置する。2×2間の縦柱建物である。柱間は梁行で、1.4m、1.4m、桁行で1.5m、1.5mを測る。桁行方位はN-47°-Wを取る。遺物は柱穴から土師器、須恵器等が出土した。時期は古墳時代後期に位置づけられる。

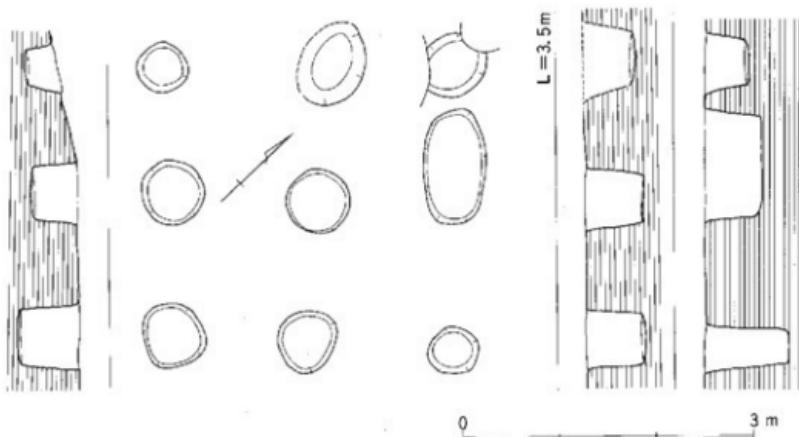


Fig. 5 SB-0111遺構実測図 (1/60)

3. 竪穴住居跡 (SC)

竪穴住居跡は6軒検出した。竪穴住居跡としたもののはほとんどが竈や炉、主柱穴等が無く、住居とするのは多少問題があるが、他の土坑と比較して、平面形、規模等で相違があり、ここでは竪穴住居跡として報告する。竪穴住居跡はほとんどが調査区北側に分布する。

SC-0001 (Fig. 6)

調査区北東側に位置し、SC-0024を切る。2カ所擾乱を受けているが、平面形は方形プランを呈し、長さ4.05×4.45m、深さ0.2mを測る。床面には柱穴を1個検出した。炉、竈は検出できなかった。埋土は黄褐色砂である。遺物は埋土中から須恵器、土師器、製塩土器、土錘が出土した。土錘は床面近くで集中して出土した。

出土遺物（1～9）

1、2は須恵器坏蓋で、口縁は嘴状を呈する。1は天井部に偏平の撮みが付く。器高2.5cm 口径16.4cmを測る。2は天井部を欠いている。11径15.0cmを測る。3、4は須恵器坏身である。体部は直線的に立ち上がる。3は口径15.1cm、4は口径15.7cmを測る。5は須恵器壺である。口縁は緩やかに外反し、口縁下には削り出しによる突帯が巡る。頸部には波状のヘラ記号がある。肩部はあまり張らず、胸部最大径は中位にある。調整は内外面ともヨコナデ、胸部外面にはハケメが施される。口径14cm、胸部最大径16.8cmを測る。6は土師器壺である。口縁は緩やかに外反し、内面はヘラケズリによって、後を持つ。口径14.0cmを測る。7は焼塙壺である。形態は円錐形を呈し、底部は欠損している。調整は内面は粗い布目（2mm間隔、それ以上の部分もある）、外面は指頭痕が残る。色調は淡橙色を呈する。胎土は細砂を少し含む。口径12.0cmを測る。8、9は土錘である。土錘には円筒形を呈するもの(8)と紡錘形を呈するもの(9)がある。以下、前者をB類、後者をA類として報告する（中央の最大径が上、下端の径の約2倍を目安に、それ以上をA類、以下をB類と分けた）。0001ではA類10個、B類8個、破片2個がある。

SC-0008 (Fig. 7)

調査区北東隅に位置する。遺構は調査区北側に広がる。1カ所擾乱を受けているが、平面形は方形プランを呈し、長さ4.0×2.0m、深さ0.25mを測る。炉、竈は検出できなかった。埋土は黄褐色砂である。遺物は埋土中から須恵器、土師器、製塙土器が出土した。

出土遺物⑩

0008で実測したのは10の須恵器坏身のみである。10は受け部は短く立ち上がり、端部は短く仕上げられる。底部は凹転ヘラケズリが施される。口径9.2cmを測る。

SC-0024 (Fig. 9)

調査区北東隅に位置し、SC-0001、SK-0002、0005に切られる。平面形は方形プランを呈し、長さ4.4×4.4m、深さ0.35mを測る。床面には土坑が1基ある。炉、竈は検出できなかった。埋土は黄褐色砂である。遺物は埋土中から須恵器、土師器、土錘、製塙土器が出土した。

出土遺物（11～26）

11～14は須恵器坏蓋である。11は天井部に偏平の撮みが付く。12、14は口縁は嘴状を呈する。12は口径14.0cm、13は15.5cm、14は21.5cmを測る。15～17は須恵器坏身である。15は口縁は直線的に開く。口径13.6cmを測る。16はハの字形に開く高台が底部外寄りに付く。高台径12.4cmを測る。17は体部は内湾気味に開き、底部外寄りにハの字形に開く高台が付く。器高5.0cm、口径13.6cm、高台7.5cmを測る。18は土師器坏蓋である。天井部には偏平の撮みが付く。器面

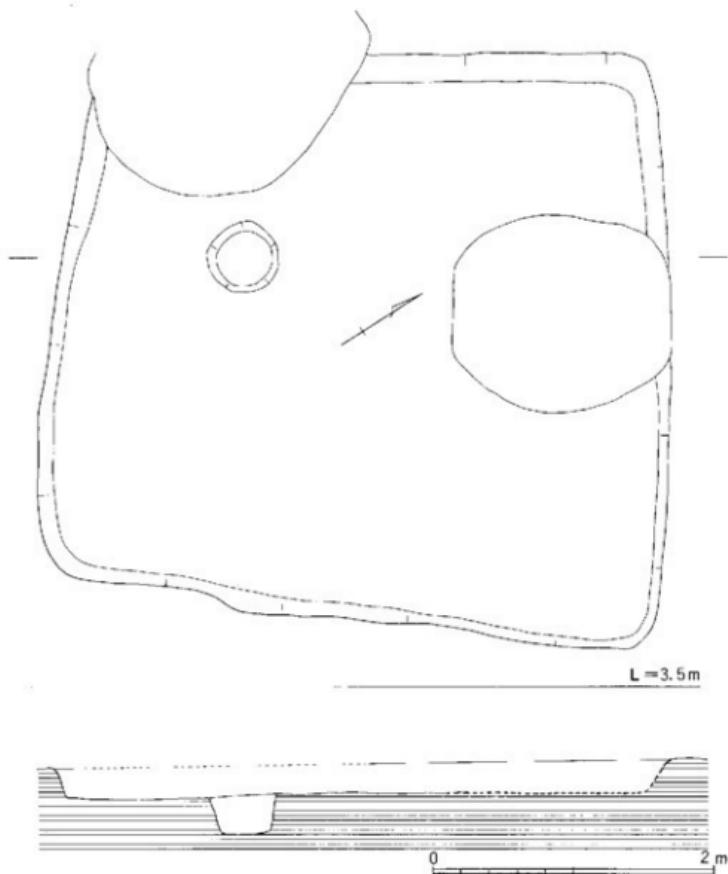


Fig. 6 SC-0001 通構実測図 (1/40)

はヘラミガキが施される。19は土師器坏身である。底部外寄りに進台形を呈する高台が付く。調整は内外面ともヘラミガキが施される。高台径13.6cmを測る。20~23は土師器壺である。11線は緩やかに外反し、内面はヘラケズリによる稜を持つ。外面はハケメを施す。24は瓶の把手である。把手は断面横円形を呈する。25、26は土鍤である。25はA類、26はB類である。0024ではA類2個、B類3個、破片3個が出土した。



Fig. 7 SC-0008遺構実測図 (1/40)

SC-0039 (Fig. 10)

調査区北中央に位置し、SK-0025、0038に切られる。中央には擾乱がある。平面形は隅丸方形プランを呈し、長さ4.6×4.85m、深さ0.25mを測る。床面には柱穴が2個ある。炉、竈は検出できなかった。埋土は黄褐色砂である。遺物は埋土中から須恵器、土師器、製塙土器が出土した。

出土遺物 (27~29)

27は須恵器壺身である。底部外寄りに低い高台が付く。高台径10.3cmを測る。28は瓶の把手である。断面形は不整円形を呈する。29は甕である。口縁はくの字形に折れ、胴部は長胴になる。調整は口縁はヨコナデ、外面は縱方向のハケメ、内面はヘラケズリを施す。口縁内面はヘラケズリによる稜を持つ。11径34cmを測る。この他、固化して出来なかつたが、移動式竈の破片も出土している。

SC-0041 (Fig. 12)

調査区北西隅に位置する。遺構は調査区北側に広がる。平面形は隅丸方形プランを呈し、長

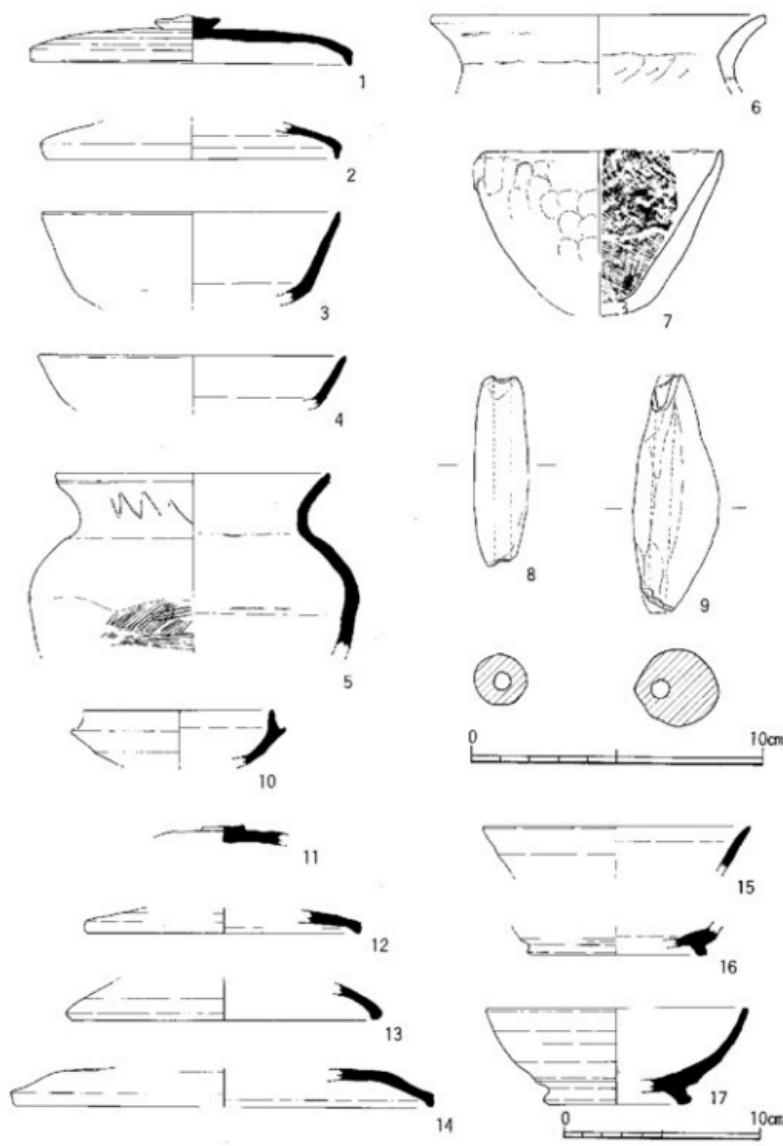


Fig. 8 整穴住居跡出土遺物実測図 1 (1/3, 1/2)

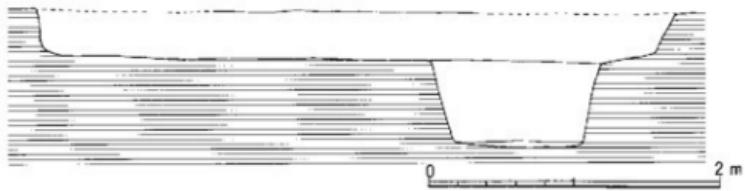


Fig. 9 SC-0024 造構実測図 (1/40)

さ4.15×4.20m、深さ0.5mを測る。唯一、主柱穴が検出できた住居で柱穴が4個ある。柱穴は径60~80cm、深さ60cmを測る。炉、竈は検出できなかった。埋土は黄褐色砂である。遺物は埋土中から須恵器、土師器、製塙土器が出土した。遺物には奈良時代の須恵器、土師器等も見られるが、布留式の甕や小型鉢、4本柱の主柱穴等、他の住居より時期的に遅るものと考えられる。

出土遺物（30~33）

30は土師器甕である。口縁は内湾し、端部は肥厚する。31は精製の小型鉢である。内外面にヘラミガキを施す。色調は赤褐色を呈する。32は多孔式の甕の底部である。破片であるが、円形の孔が2カ所あけられている。33は高壺の脚部である。形態はラッパ形に開く。調整は外面は縦方向のハケメ、内面は横方向のヘラケズリを施す。壺内面はヘラケズリによって、棱を持つ。底径13.6cmを測る。

SC-0044 (Fig. 13)

調査区北中央に位置し、SK-0040に切られる。平面形は隅丸方形プランを呈し、長さ3.85×3.9m、深さ0.35mを測る。床面には柱穴が1個ある。炉、竈は検出できなかった。埋土は黄褐色砂である。遺物は埋土中から須恵器、土師器、製塙土器が出土した。

出土遺物（34~36）

34は須恵器壺蓋である。大井部は欠損している。口縁端は僅かに下垂する。口径15.2cmを測る。35はくの字形に折れる。調整は口縁はヨコナデ、外面は縦方向のハケメ、内面はヘラケズリを施す。口縁内面はヘラケズリによって、棱をもつ。36は壺の把手である。断面円形を呈する。調整は把手の部分はナデ、体部は格子目叩きが施される。内面には當て具痕が残る。色調は黄褐色を呈する。

SC-0201 (Fig. 4)

今回の調査で唯一南側で検出した住居である。遺構の大半を近代の井戸、廐窓坑によって切られている。平面形は隅丸方形プランを呈すると推測されるが、規模は不明である。主柱穴、か、竈は検出できなかった。埋土は黄褐色砂である。遺物は埋土中から弥生土器、古式土師器、石錘が出土した。

出土遺物（37~40）

37、38は弥生土器である。37は短頸壺である。口縁は外湾気味に直立し、体部は扁球形を呈する。胴部最大径は中位にある。底部は平底である。調整は内外面ともハケメを施す。器高14.5cm、口径10.0cm、底径7.0cmを測る。38は長頸壺である。口頸部は欠損している。体部は扁球形を呈する。胴部最大径は中位にある。調整は外面上半はヘラミガキ、下半はハケメを施す。

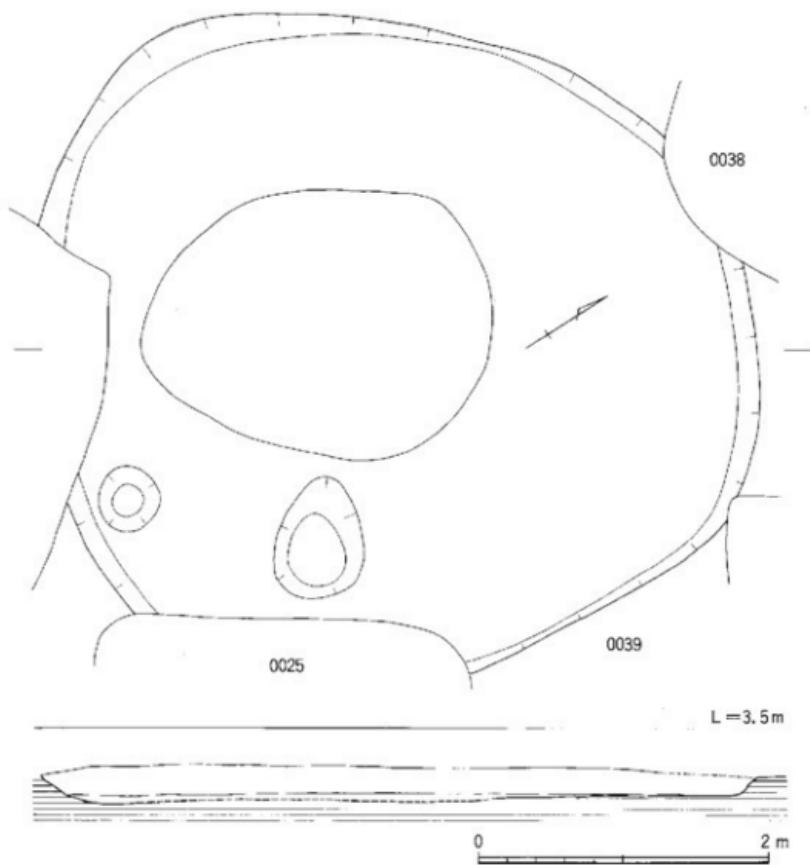


Fig. 10 SC-0039遺構実測図 (1/40)

す。内面は指頭痕を残す。胴部最大径は21.0cmを測る。39は布留式の甕である。口縁は内湾して開き、端部は外側につまみ出される。胴部は球形を呈する。調整は口縁頸部はヨコナデ、外面は横方向のハケメ、内面は横方向のヘラケズリを施す。口径16.5cmを測る。40は滑石製の石錘である。形態は紡錘形を呈し、上方の横方向には1条の溝が彫り込まれる。下方には1個孔があけられ、そこから上方に向かって縱方向に溝が彫り込まれる。器面には整形の際の削り痕が残る。長さ5.4cm、幅3.0cmを測る。

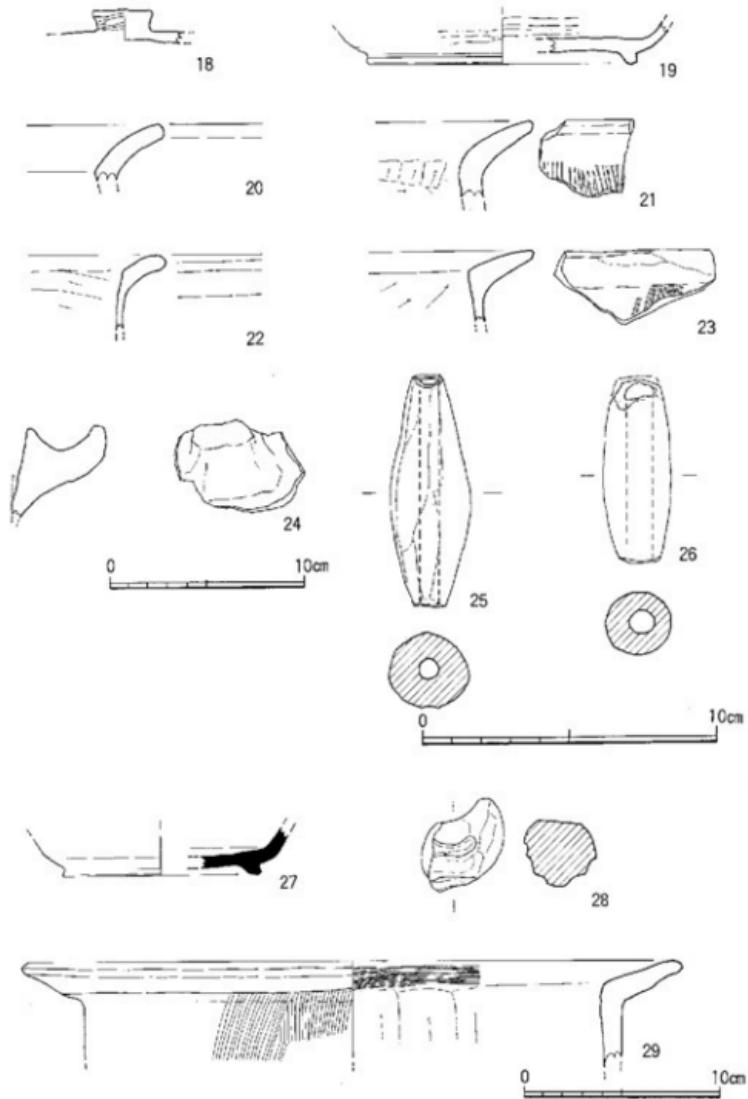


Fig. 11 暫穴住居跡出土遺物実測図 2 (1/3、1/2)

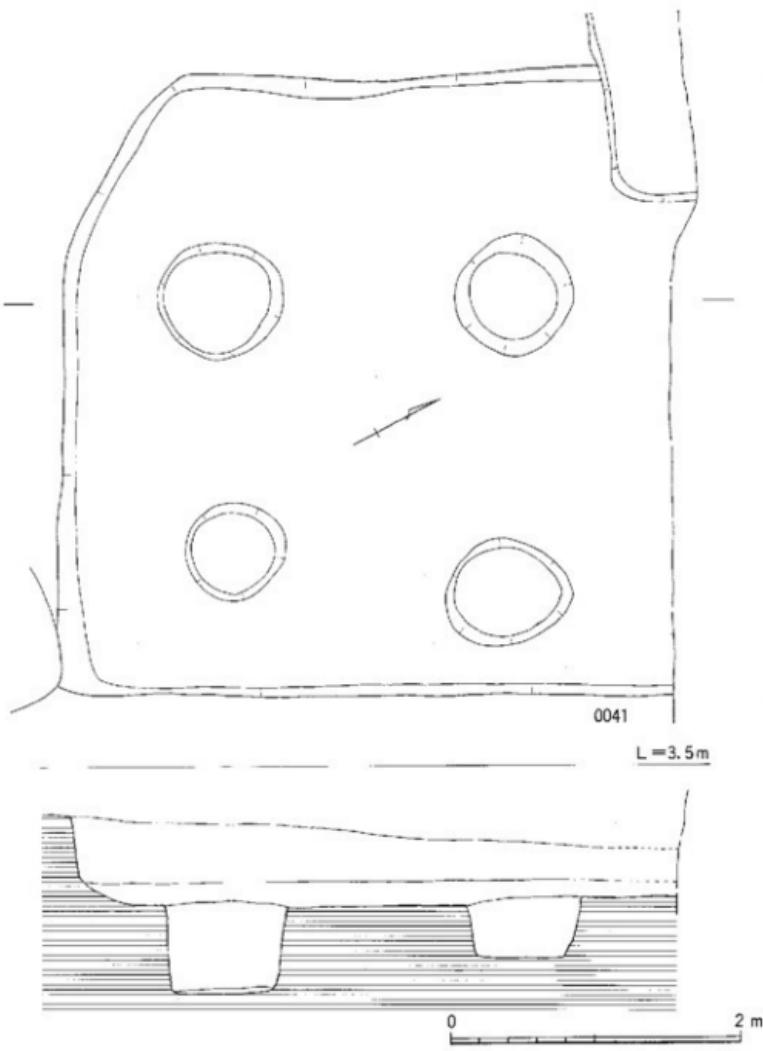


Fig. 12 SC-0041遺構実測図 (1/40)

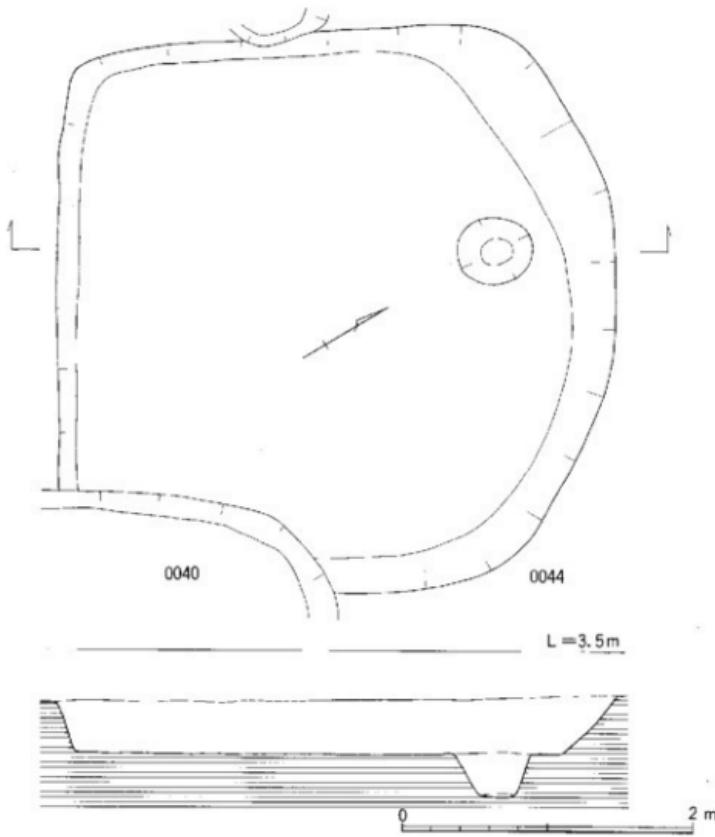


Fig. 13 SC-0044遺構実測図 (1/40)

Tab. 1 壁穴住居跡出土土錐一覧表

番号	遺構	長さ cm	幅 cm	重さ g	番号	遺構	長さ cm	幅 cm	重さ g
1	0001	8.3	2.85	50	12	0001	9.1	2.84	49
2	0001	6.7	1.77	17.5	13	0001	8.0	2.50	49
3	0001	6.7	1.91	20.2	14	0001	7.8	2.51	35
4	0001	7.4	2.29	35	15	0001	7.7	2.69	44
5	0001	6.8	2.03	20	16	0001	7.5	2.49	35
6	0001	6.7	1.79	20	17	0001 (P-1)	7.6	2.43	34
7	0001	7.4	2.26	31	29	0024	7.2	2.20	32.5
8	0001	8.0	1.91	22	30	0024	6.4	2.2	32
9	0001	8.8	2.46	45	31	0024	8.0	2.59	50
10	0001	6.9	2.26	29	39	0041	7.1	1.83	19
11	0001	8.0	2.65	41					

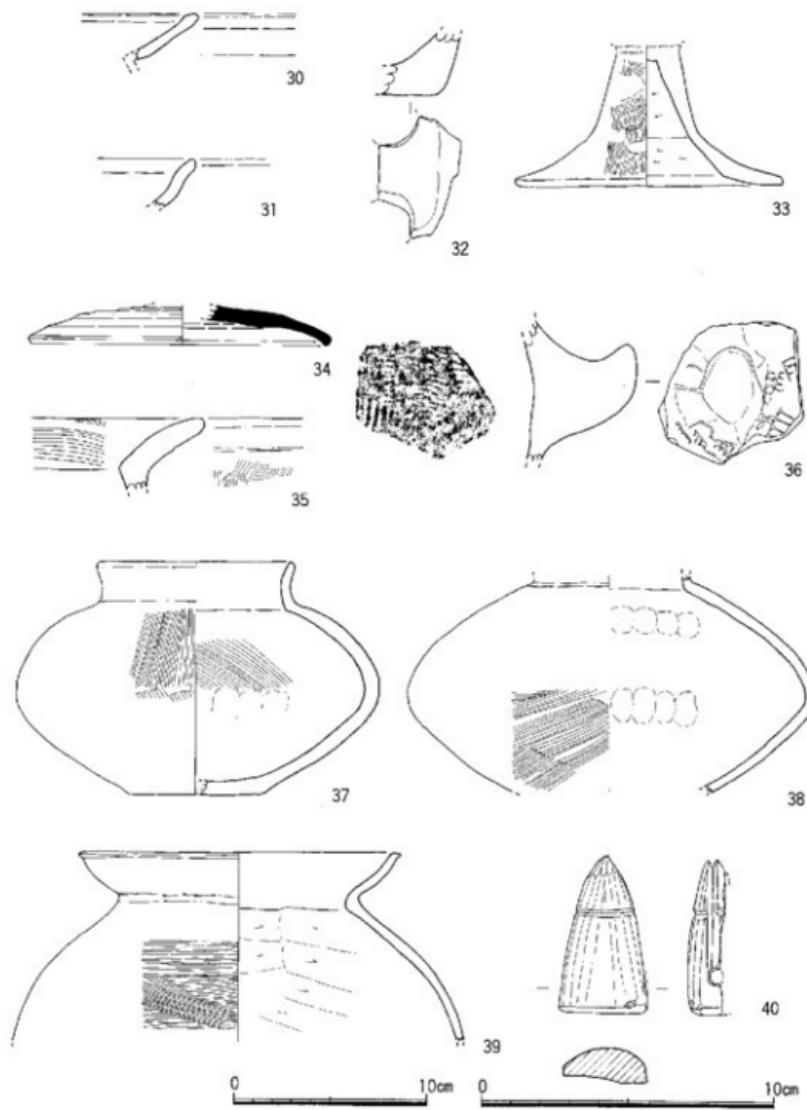


Fig. 14 壇穴住居跡出土遺物実測図 3 (1/3, 1/2)

4. 土坑 (SK)

今回の調査では103基の土坑を検出した。遺構の時期は古墳時代～奈良時代を主体とする。いずれの土坑も遺物の出土量は少ない。

SK-0002 (Fig. 15)

調査区北東側にあり、SC-0024を切る。平面形は長方形を呈し、長さ2.75m、幅2.0mを測る。断面形は逆台形を呈し、深さ0.25mを測る。埋土は黄褐色砂である。遺物は埋土中から須恵器、土師器、土鍤等が出土した。

出土遺物 (121)

0002からはA類1点、破片1点が出土した。

SK-0003 (Fig. 15)

調査区北東隅にあり、遺構は北側に広がる。平面形は長方形を呈し、長さ3.15m、幅2.4mを測る。断面形は逆台形を呈し、深さ0.6mを測る。坑底には柱穴が1個ある。埋土は黄褐色砂である。遺物は埋土中から須恵器、土師器、製塙器等が出土した。

出土遺物 (41～49)

41、42は須恵器壺蓋である。41は口縁は嘴状を呈する。天井部は欠損している。口径13.2cmを測る。42は内面に短いかえりが付く。43～46は須恵器壺身である。底部外寄りに断面逆台形の高台が付く。体部は直線的に延びる。43は器高4.9cm、口径13.2cm、高台径10.0cm、44は高台径8.4cm、45は高台径10.8cmを測る。47は瓶である。口縁は若干外反する。調整は外面は綫方向のハケメ、内面はヘラケズリを施す。口縁内面にはヘラケズリによって稜が付く。48は土師器甕である。口縁はくの字形に折れる。調整は外面は綫方向のハケメ、内面は横方向のヘラケズリを施す。口縁内面にはヘラケズリによって稜が付く。49は土師器高壺の脚部である。形態は柱状を呈し、裾で屈曲する。外面は綫方向のケズリである。内面にはしづり痕がのこる。色調は赤褐色を呈する。

SK-0006 (Fig. 16)

調査区北側中央にあり、SK-0007を切る。平面形は方形を呈し、長さ1.45cm、幅1.35cmを測る。断面形は逆台形を呈し、深さ0.45mを測る。埋土は黄褐色砂である。遺物は埋土中から須恵器、土師器、土鍤等が出土した。

出土遺物 (122、123)

0006からはA類が3点、B類1点、破片6点が出土した。

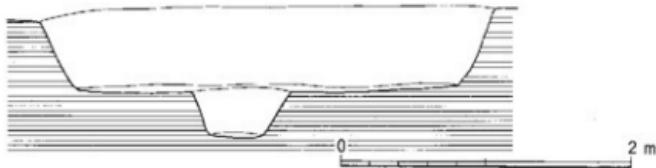
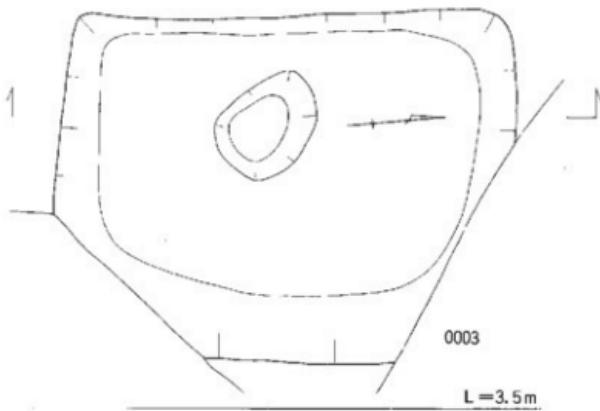
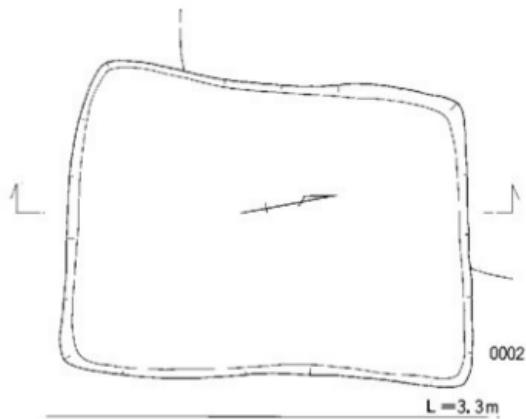


Fig. 15 SK-0002, 0003造構実測図 (1/40)

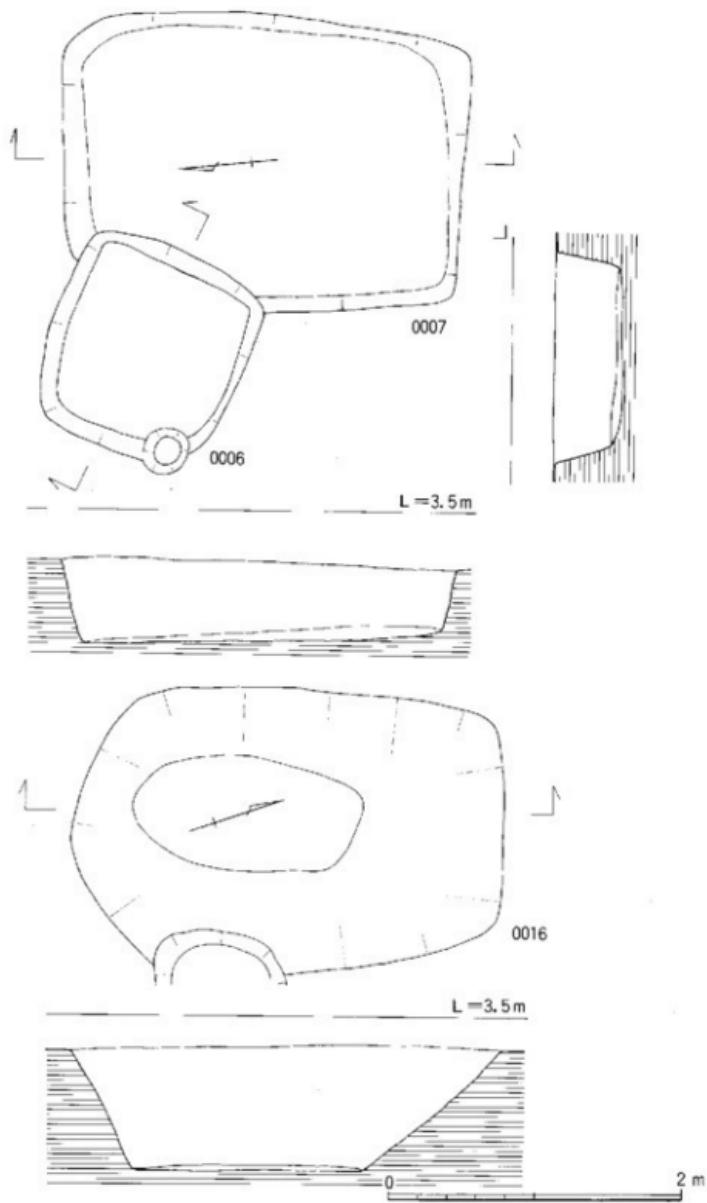


Fig. 16 SK-0006, 0007, 0016構造実測図 (1/40)

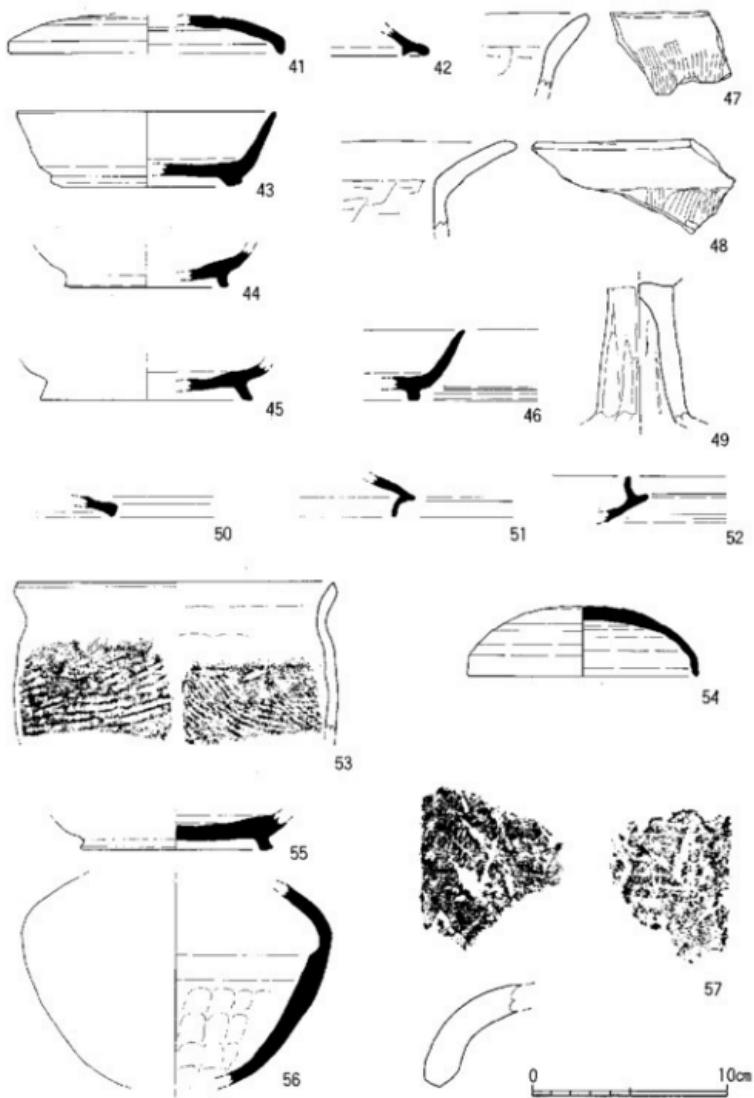


Fig. 17 土坑出土遺物実測図 1 (1/3)

SK-0007 (Fig. 16)

調査区北側中央にあり、SK-0006に切られる。平面形は長方形を呈し、長さ2.75m、幅2.05mを測る。断面形は逆台形を呈し、深さ0.55mを測る。埋土は黄褐色砂である。遺物は埋土中から須恵器、土師器、製塙土器、土錐等が出土した。

出土遺物 (50~53)

50、51は須恵器坏蓋である。50は口縁はわずかに下垂する。51は内面に長く延びるかえりが付く。52は須恵器坏身である。受け部は内湾して短く延びる。端部は丸く仕上げる。底部は回転ヘラケズリを施す。53は製塙土器である。口縁は緩やかに外反し、端部は上方につまみ上げる。体部は直線的に延びる。調整は口縁はヨコナデ、外面は横方向の平行叩き、内面は円弧文の当て具痕が残る。器面は二次焼成のため、剥落している。口径16.0cmを測る。土錐はB類3点、破片1点がある。

SK-0016 (Fig. 16)

調査区北側中央にある。平面形は不整梢円形を呈し、長さ2.95m、幅2.0mを測る。断面形は逆台形を呈し、深さ0.85mを測る。埋土は黄褐色砂である。遺物は埋土中から須恵器、土師器、製塙土器、土錐等が出土した。

出土遺物 (54)

54は須恵器坏蓋である。天井部と口縁の境は不明瞭である。天井部には回転ヘラケズリを施す。器高3.2cm、口径11.8cmを測る。土錐は破片2点が出土した。

SK-0019

調査区北西側にある。平面形は不整梢円形を呈し、長さ1.7m、幅1.4mを測る。断面形は逆台形を呈し、深さ0.4mを測る。埋土は黄褐色砂である。遺物は埋土中から須恵器、土師器、製塙土器、瓦等が出土した。

出土遺物 (55~57)

55は須恵器坏身である。高台は底部外寄りに付き、高台径は10.0cmを測る。56は長頸壺の胴部である。口頸部と底部は欠損している。外面はナデ、内面は指頭痕が残る。57は丸瓦である。凸面は繩目叩き後ナデ、凹面は布目が残る。側面は面取りする。色調は灰白色を呈する。

SK-0023 (Fig. 18)

調査区中央東寄りにあり、SK-0031を切る。造構の南半は搅乱を受けている。平面形は長方形を呈し、長さ3.4m、幅2.0mを測る。断面形は逆台形を呈し、深さ0.2mを測る。土は黄褐色砂である。遺物は埋土中から須恵器、土師器、製塙土器、土錐等が出土した。

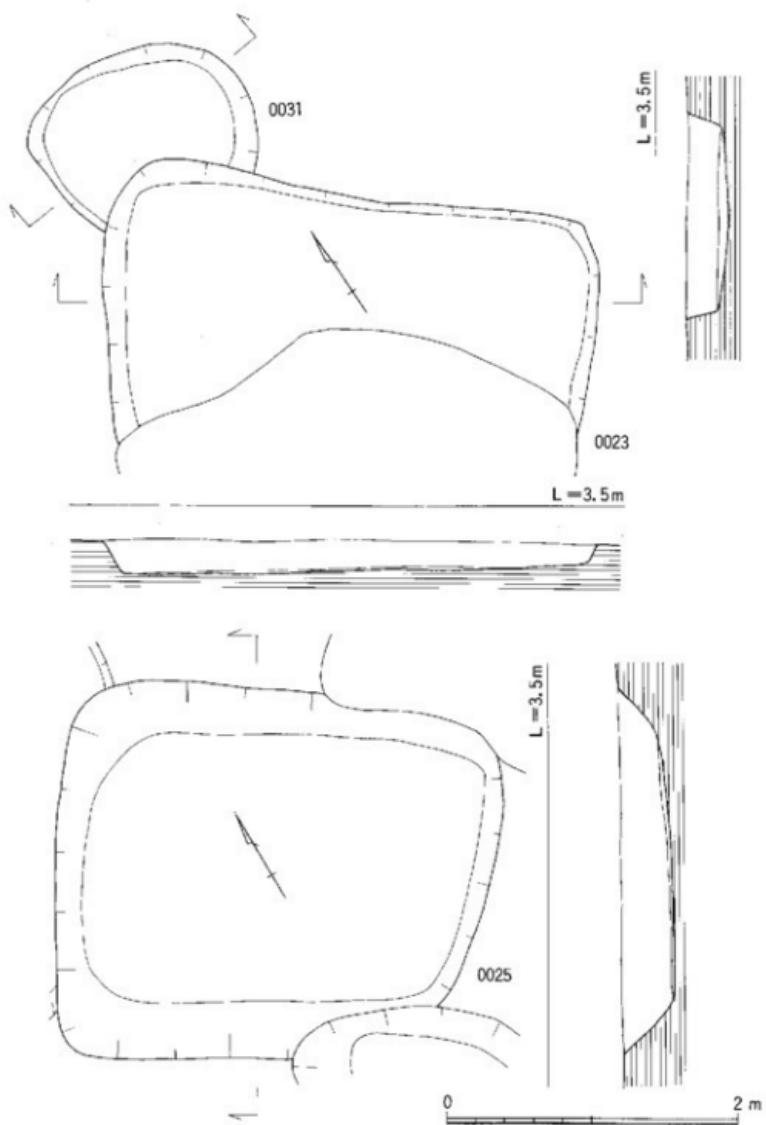


Fig. 18 SK-0023、0031、0025遺構実測図 (1/40)

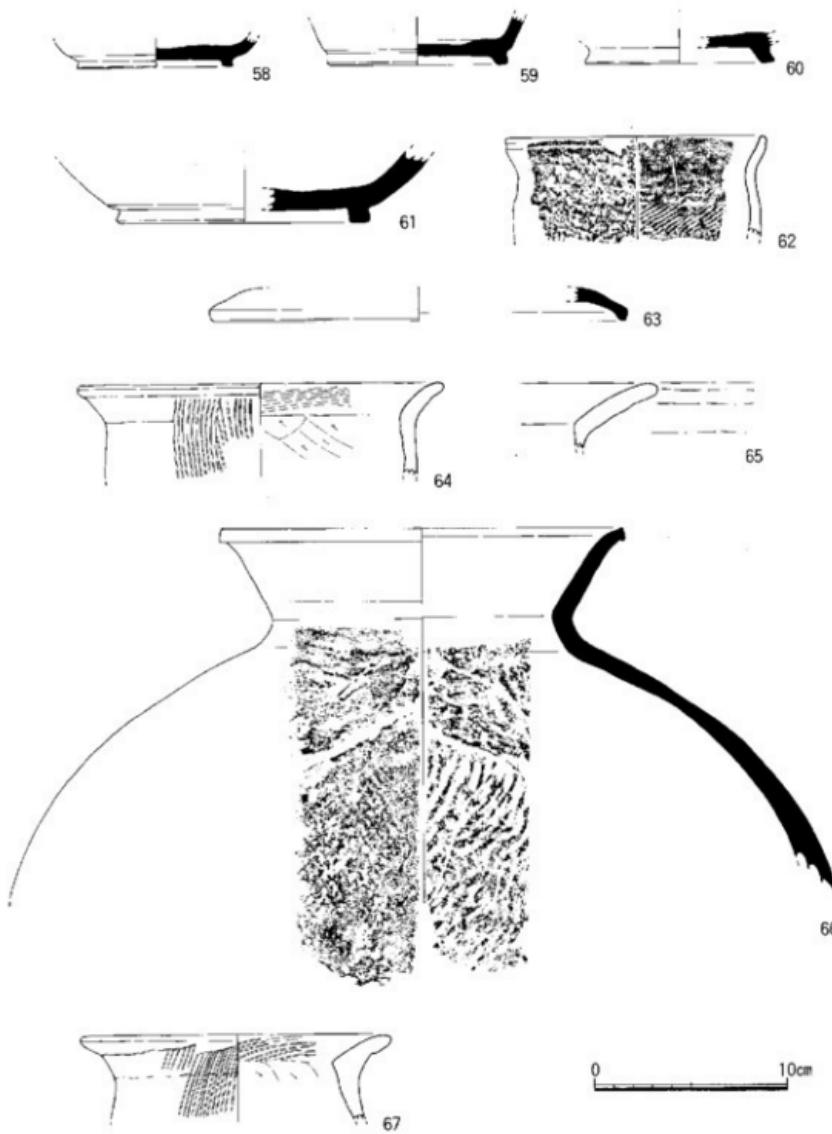


Fig. 19 土坑出土遺物実測図 2 (1/3)

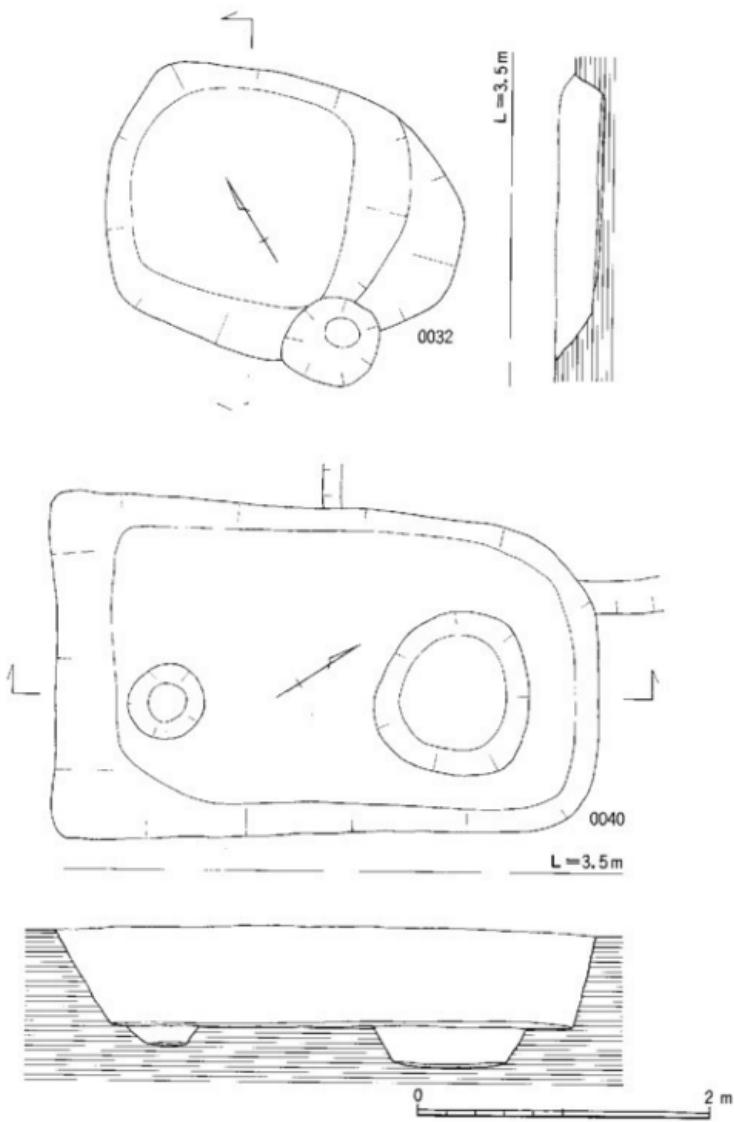


Fig. 20 SK-0032, 0040遺構実測図 (1/40)

出土遺物（58～62）

58～60は須恵器坏身である。底部外寄りに高台が付く。底径8.0cm、9.4cm、9.6cmを測る。61は須恵器壺底部である。底部外寄りに断面逆台形の高台が付く。高台径13.0cmである。62は製塙土器である。口縁は緩やかに外反し、端部は上方につまみ上げる。調整は口縁はヨコナデ、外面は横方向の平行叩き、内面は円弧文の当て具痕が残る。口径13.4cmを測る。器面は二次焼成のため、剥落している。土錘は破片2点が出土した。

SK-0031 (Fig. 18)

調査区中央東寄りにあり、SK-0031を切る。平面形は梢円形を呈し、長さ1.45m、幅0.9mを測る。断面形は逆台形を呈し、深さ0.3mを測る。埋土は黄褐色砂である。遺物は埋土中から須恵器、土師器、製塙土器等が出土した。

出土遺物（68）

68は須恵器坏身である。底部にはハの字形の高台が付く。高台径8.0cmを測る。

SK-0025 (Fig. 18)

調査区北側中央にあり、SC-0039を切る。平面形は長方形を呈し、長さ3.00m、幅2.6mを測る。断面形は逆台形を呈し、深さ0.3mを測る。埋土は黄褐色砂である。遺物は埋土中から須恵器、土師器、製塙土器、土錘等が出土した。

出土遺物（63～65）

63は須恵器坏身である。口縁は嘴状を呈する。口径22.5cmを測る。土錘はB類が2点ある。

SK-0032 (Fig. 20)

調査区中央東寄りにある。平面形は不整長方形を呈し、長さ2.5m、幅1.95mを測る。断面形は逆台形を呈し、深さ0.3mを測る。埋土は黄褐色砂である。遺物は埋土中から須恵器、土師器、土錘等が出土した。

出土遺物（69～71）

69は須恵器坏蓋である。口縁内面には短いかえりが付く。口径9.0cmを測る。70は須恵器坏身である。高台径7.6cmを測る。71は土師器高坏の坏部である。口縁は直線的に延び、下半で屈曲する。口径11.0cmである。

SK-0040 (Fig. 20)

調査区北側中央にあり、SC-0044を切る。平面形は長方形を呈し、長さ2.75m、幅2.25mを測る。断面形は逆台形を呈し、深さ0.7mを測る。坑底には柱穴が2個ある。埋土は黄褐色

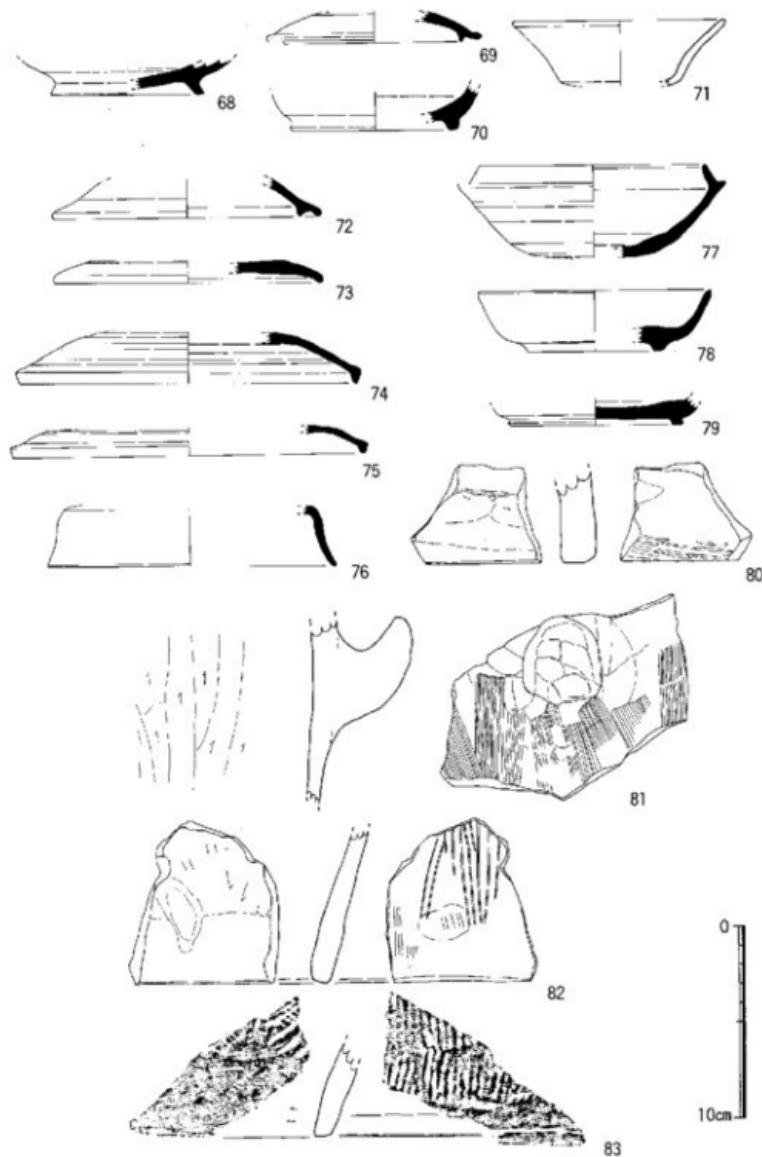


Fig. 21 土坑出土遺物実測図 3 (1/3)

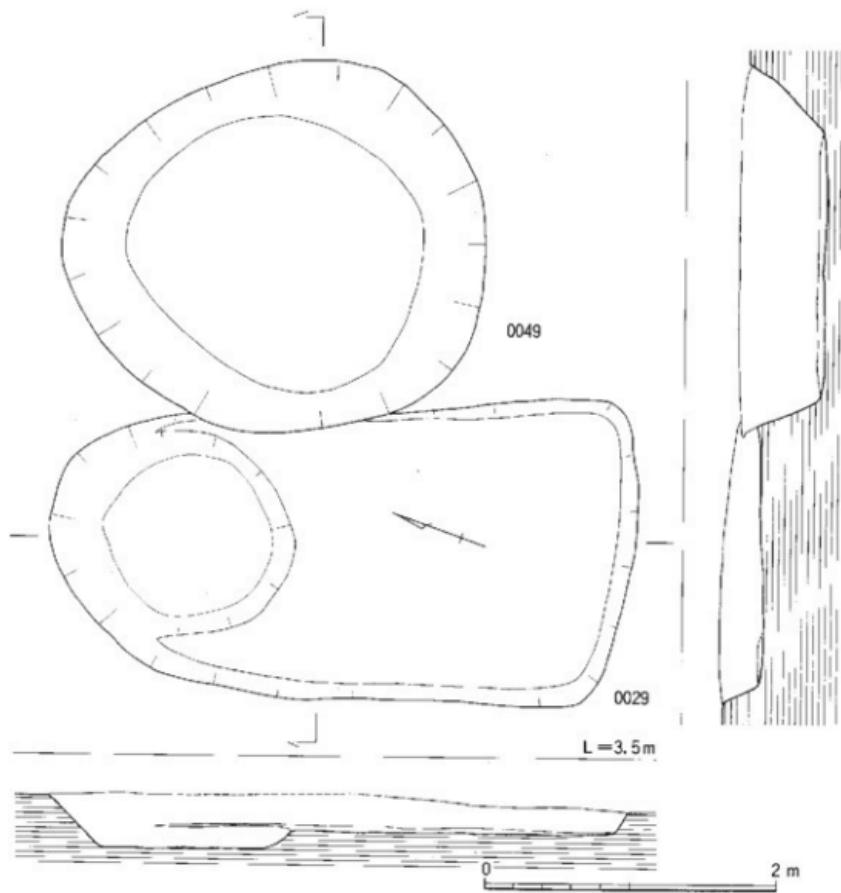


Fig. 22 SK-0029、0049遺構実測図 (1/40)

砂である。遺物は埋土中から須恵器、土師器、製塩土器、土鏡等が出土した。

出土遺物 (72~83)

72~75は須恵器坏蓋である。72は口縁内面には短いかえりが付く。口径11.8cmを測る。73~75は口縁は嘴状を呈する。口径13.6cm、17.2cm、18.0cmを測る。76は須恵器坏蓋である。口縁は直線的に延び、天井部は平坦である。口径は14.8cmを測る。77~79は須恵器坏身である。77は短い受け部が内傾して付く。端部は丸く仕上げる。底部は回転ヘラケズリを施す。口径11.4cm

を測る。78、79は須恵器坏身で、底部外寄りに低い高台が付く。78は器高3.0cm、口径12.0cm、高台径7.2cmを測る。79は高台径9.0cmを測る。80は竈の底部片である。外面は横方向のハケメ、内面は横方向のヘラケズリを施す。81～83は甌である。81は断面円形の把手で、胴部の調整はハケメ、内面は縦方向へのヘラケズリである。82は底部片で、外面は縦方向のハケメ、内面は縦方向のヘラケズリである。83は外面は縦方向の平行叩き、内面には円弧文の当て具痕が残る。色調は黄褐色を呈する。土錐は破片1点がある。

SK-0029 (Fig. 22)

調査区中央東寄りにあり、SK-0049に切られる。平面形は不整長方形を呈し、長さ4.05m、幅2.0mを測る。断面形は逆台形を呈し、深さ0.25mを測る。埋土は黄褐色砂である。遺物は埋土中から須恵器、土師器、製塙土器、土錐等が出土した。

出土遺物 (66、67)

66は須恵器甌である。口頭部は直線的に外傾する。調整は格子目叩き、内面は円弧文の当て具痕が残る。色調は淡橙色を呈する。口径20.8cmを測る。67は土師器甌である。口縁は緩やかに外反する。調整は外面は縦方向のハケメ、内面はヘラケズリを施す。口縁内面はヘラケズリによって稜を持つ。口径16.0cmを測る。土錐はB類3点、破片2点がある。

SK-0047

調査区北西側にある。平面形は不整梢円形を呈し、長さ2.0m、幅1.8mを測る。断面形は逆台形を呈し、深さ0.4mを測る。埋土は黄褐色砂である。遺物は埋土中から須恵器、土師器、製塙土器、瓦等が出土した。

出土遺物 (84、85)

84は須恵器坏身である。口縁内面には短いかえりが付く。85は平瓦である。凸面はナデ、凹面は粗い布目模が残る。端面は面取りする。色調は灰白色を呈する。

SK-0049 (Fig. 22)

調査区中央東寄りにあり、SK-0029を切る。平面形は円形を呈し、長さ2.9m、幅2.5mを測る。断面形は逆台形を呈し、深さ0.55mを測る。埋土は黄褐色砂である。遺物は埋土中から須恵器、土師器、製塙土器、土錐等が出土した。

出土遺物 (86～90)

86、87は須恵器坏蓋である。天井部には偏半の撮みが付く。口縁は嘴状を呈する。器高3.4cm、3.0cm、口径14.8cm、16.0cmを測る。88、89は須恵器坏身である。口縁は直線的に立ち上がる。口径11.6cm、16.6cmを測る。90は須恵器甌胴部である。外面は縦方向の平行叩き、内面は同心

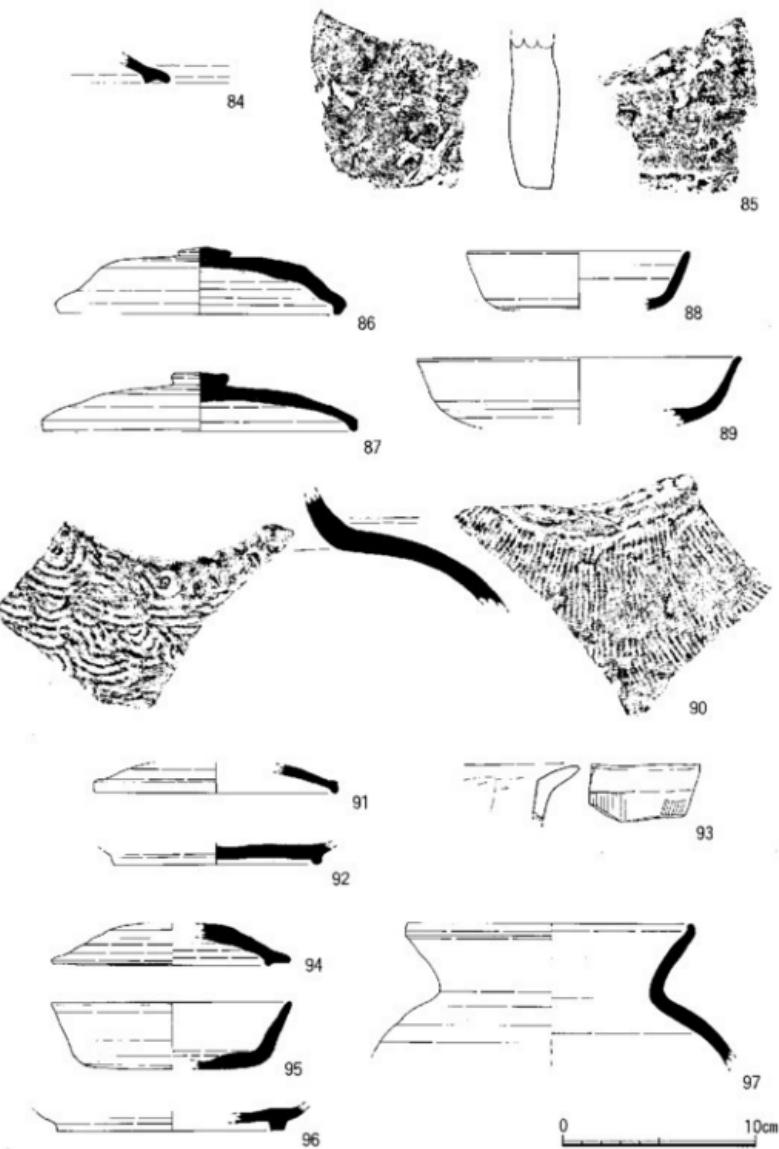


Fig. 23 土坑出土遺物実測図 4 (1/3)

円文の当て具痕が残る。土錘はB類3点、破片3点がある。

SK-0052

調査区中央北側にあり、051に切られる。平面形は方形を呈し、長さ2.5m、幅2.4mを測る。断面形は逆台形を呈し、深さ0.55mを測る。埋上は黄褐色砂である。遺物は埋土から須恵器、土師器、製塙土器、土錘等が出土した。

出土遺物 (91~93)

91は須恵器壺蓋である。口縁は嘴状を呈する。口径12.4cmを測る。92は須恵器壺身である。底部には低い高台が付く。高台径10.8cmを測る。93は土師器壺である。口縁はくの字形に折れる。内面はヘラケズリによる棱を持つ。

SK-0053出土遺物 (94~96)

調査区中央北側にある。平面形は明確でない。須恵器、土師器、製塙土器、土錘等が出土した。94は須恵器壺蓋である。口縁内面には短いかえりが付く。口径9.8cmを呈する。95、96は須恵器壺身である。95は体部は直線的に延びる。底部は回転ヘラケズリ後ナデを施す。口径12.0cmを測る。96は底部外寄りに低い高台が付く。高台径11.8cmを測る。土錘はA類1点、破片1点が出土した。

SK-0054 (Fig. 24)

調査区中央東寄りにある。平面形は円形を呈し、長さ1.95m、幅1.85mを測る。断面形は逆台形を呈し、深さ0.55mを測る。埋上は黄褐色砂である。中央には柱穴が1個ある。遺物は埋土中から須恵器、土師器等が出土した。

出土遺物 (97)

97は須恵器壺である。口縁は直線的に外反し、縫部は上方につまみ上げる。調整は内外面ともヨコナデを施す。色調は灰白色を呈する。口径14.6cmを測る。

SK-0058出土遺物 (98)

調査区中央西側にある。平面形は橢円形を呈する。98は須恵器壺蓋である。口縁は嘴状を呈する。口径17.8cmを測る。

SK-0055 (Fig. 24)

調査区中央にある。遺構の南側に擾乱を受ける。平面形は橢円形を呈し、長さ2.65m、幅1.6mを測る。断面形は逆台形を呈し、深さ0.4mを測る。埋土は黄褐色砂である。遺物は土坑の東

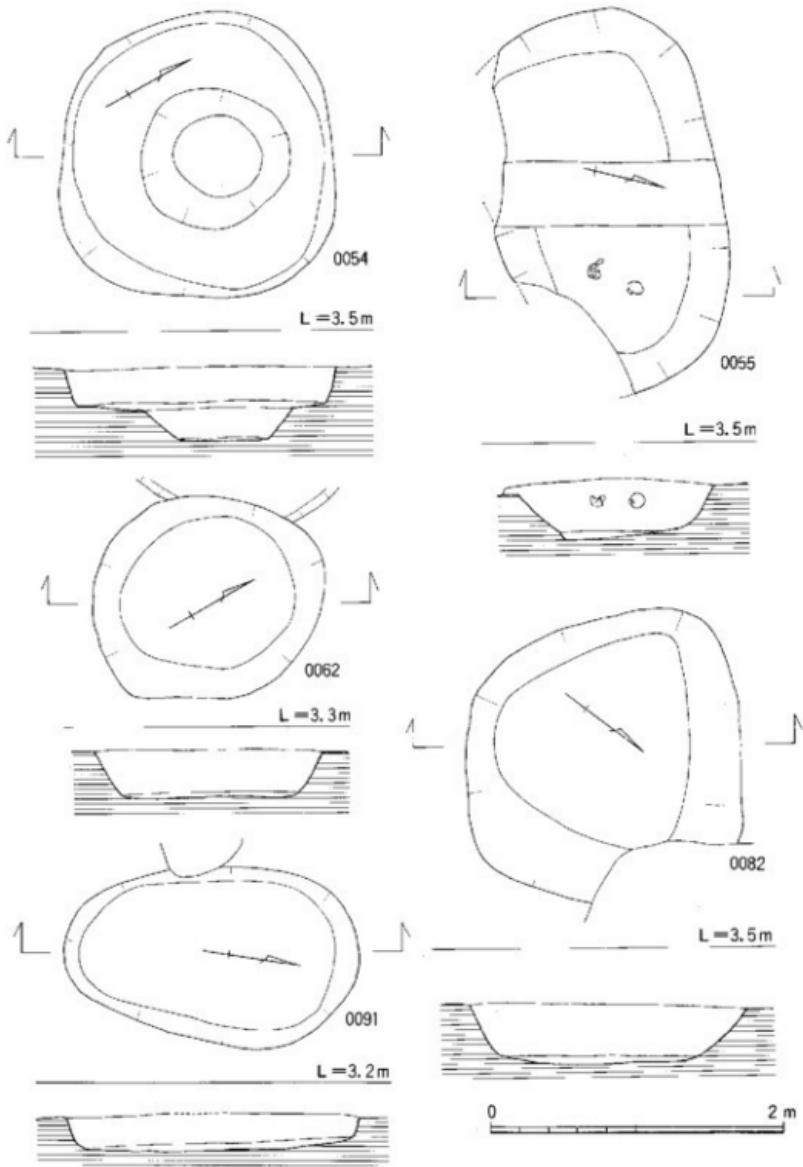


Fig. 24 SK-0054、0055、0062、0082、0091構造実測図 (1/40)

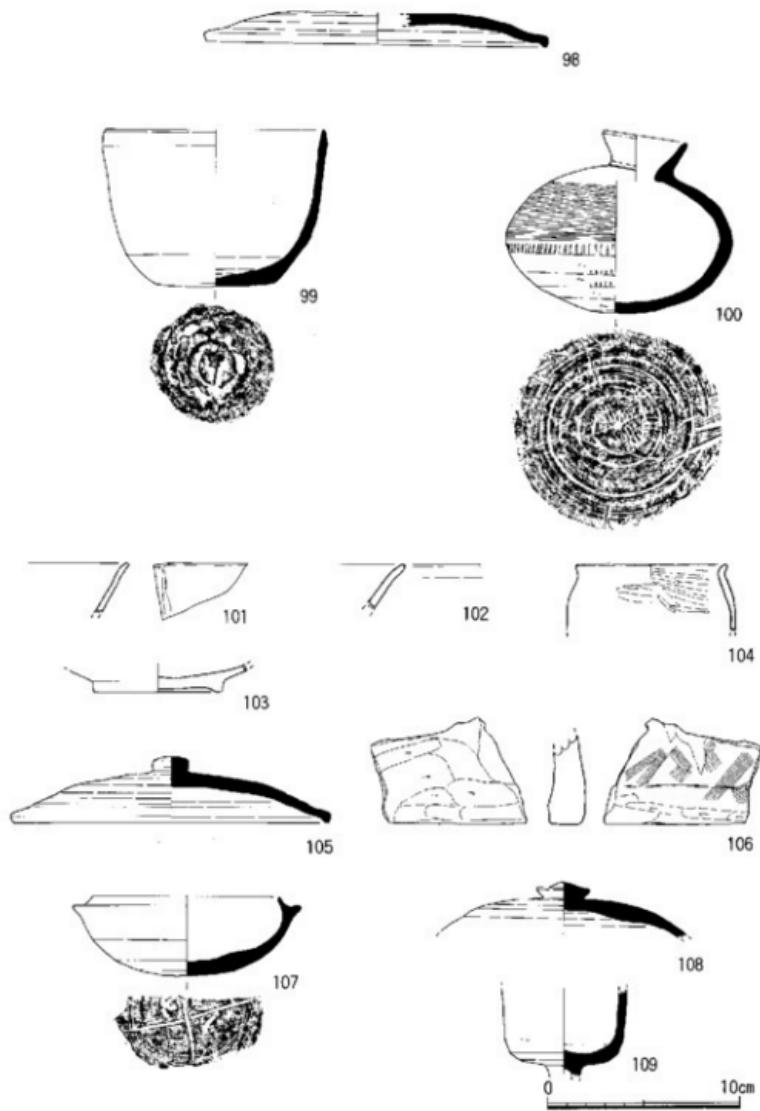


Fig. 25 土坑出土遺物実測図 5 (1/3)

側で完形の横瓶1、壺1が出土した。

出土遺物 (99、100)

99は須恵器壺身である。口縁は直線的に延び、底部は平底である。底部はヘラ切り木調整である。器高8.0cm、口径11.0cmを測る。100は横瓶である。調整は口縁はヨコナデ、胴部外面は上半はカキメを、下半は平行叩き後回転ヘラケズリを施す。底部にはヘラ記号がある。色調は赤褐色を呈する。器高9.5cm、口径4.5cmを測る。

SK-0062 (Fig. 24)

調査区中央にある。SK-0061を切る。平面形は楕円形を呈し、長さ1.65m、幅1.45mを測る。断面形は逆台形を呈し、深さ0.35mを測る。埋土は黄褐色砂である。遺物は埋土中から須恵器、土師器、越州窯系青磁、黒色土器等が出土した。

出土遺物 (101-104)

101、102は越州窯系青磁である。101は輪花文の碗で、釉色はオリーブ色を呈する。102は二次焼成を受けて、釉が剥落している。103は白磁である。高台内側のみ露胎となる。釉色は白色を呈する。高台径6.8cmを測る。104は黒色土器B類の小型鉢である。内外面ともヘラミガキが施される。口径8.0cmを測る。

SK-0063出土遺物 (105)

調査区中央西側にある。平面形は楕円形を呈する。近世の壺構である。105は須恵器壺蓋である。天井部には宝珠の撒みが付く。口縁は嘴状を呈する。器高3.4cm、口径16.0cmを測る。

SK-0069出土遺物 (106)

調査区中央西側にある。平面形は楕円形を呈する。近世の壺構である。106は壺の底部片である。調整は外面はハケメ、端部はヘラケズリ、内面はヘラケズリである。

SK-0072出土遺物 (107)

調査区中央にある。平面形は楕円形を呈する。107は須恵器壺身である。短く内傾する受け部が付く。底部は回転ヘラケズリを施す。底部にはヘラ記号がある。器高4.2cm、口径9.8cmを測る。

SK-0082 (Fig. 24)

調査区中央にある。壺構の東側に擾乱を受ける。平面形は不整方形を呈し、長さ1.9m、幅1.9mを測る。断面形は逆台形を呈し、深さ0.4mを測る。埋土は黄褐色砂である。遺物は埋土中か

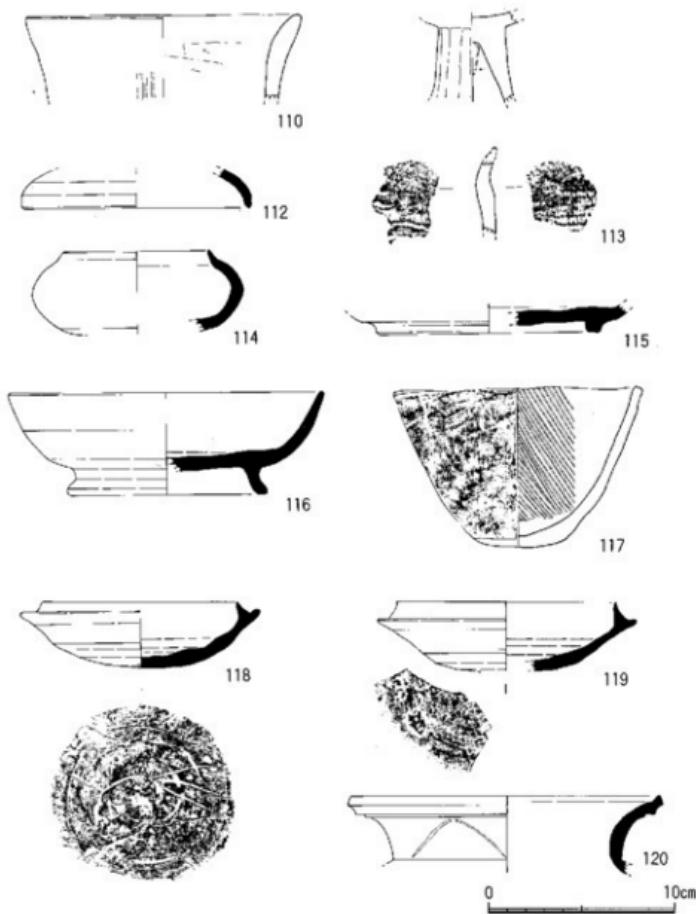


Fig. 26 土坑出土遺物実測図 6 (1/3)

ら須恵器、上師器、製塙上器等が出土した。

出土遺物 (108~109)

108は須恵器壺蓋である。天井部には偏平の撇みが付く。109は小型の高壺である。壺は直線的に立ち上がる。

SK-0088出土遺物 (110~111)

調査区中央にある。平面形は長方形を呈する。遺物は埋土中から須恵器、土師器、製塙土器等が出土した。111は土師器瓶である。口縁は緩やかに外反する。内面はヘラケズリによる棱をもつ。口径14.8cmを測る。111は土師器高壺である。器面は綫方向のケズリを施す。

SK-0091 (Fig. 24)

調査区中央にある。平面形は楕円形を呈し、長さ2.0m、幅1.2mを測る。断面形は逆台形を呈し、深さ0.25mを測る。埋土は黄褐色砂である。遺物は埋土中から須恵器、土師器、製塙土器等が出土した。

出土遺物 (112~114)

112は須恵器壺蓋である。口径12.2cmを測る。113は須恵器短頸壺である。口縁は内傾して短く延びる。11径7.8cmを測る。114は製塙土器である。口縁は緩やかに外反する。調整は外面は横方向の平行叩き、内面は円弧文の當て具痕が残る。器面は二次焼成のため剥落している。

SK-0105出土遺物 (115)

115は須恵器壺身である。底部には低い高台が付く。高台径11.8cmを測る。

SK-0096出土遺物 (116)

116は須恵器壺身である。体部は内湾気味に立ち上がり、ハの字形に聞く高い高台が付く。器高5.5cm、口径16.6cm、高台径10.0cmを測る。

SK-0210出土遺物 (117)

調査区西側にある。平面形は長方形を呈する。遺物は埋土中から古式土師器等が出土した。117は土師器鉢である。口縁は直線的に延び、底部は痕跡的な平底である。調整は外面は粗い横方向の叩き、内面はハケメを施す。器高8.5cm、口径13.6cmを測る。

SK-0222出土遺物 (118~120)

調査区西側にある。遺物は埋土中から須恵器、土師器等が出土した。118、119は須恵器壺身である。短く内傾する受け部が付く。底部は回転ヘラケズリを施す。底部にはヘラ記号がある。口径10.4cm、11径11.4cmを測る。120は須恵器壺である。口縁下には突唇が付く。頸部にはヘラ記号がある。口径16.4cmを測る。

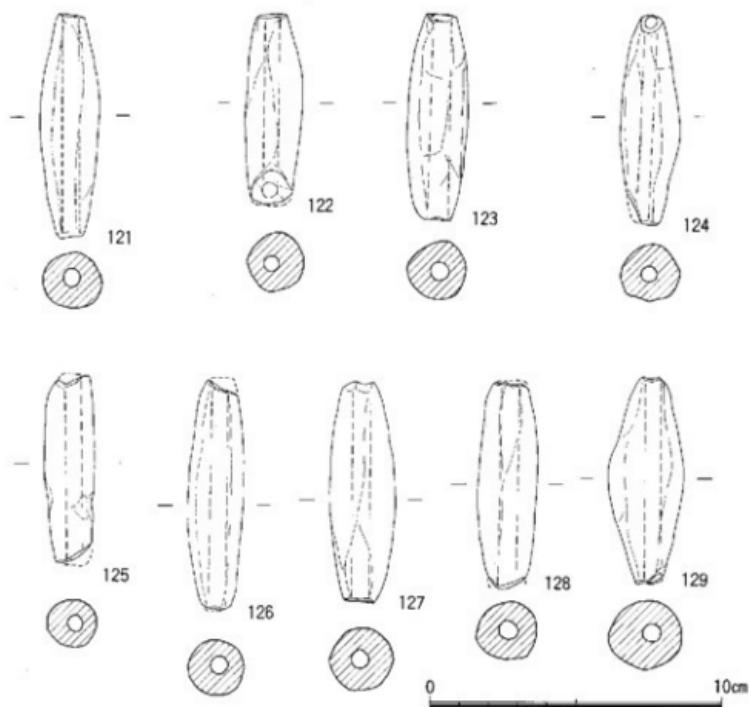


Fig. 27 土坑出土土錐実測図 7 (1/3)

Tab. 2 土坑出土土錐一覧表

番号	遺構	長さ cm	幅 cm	重さ g	番号	遺構	長さ cm	幅 cm	重さ g
18	0002	7.7	1.81	30	33	0029	7.5	1.9	32.5
19	0005	6.5	1.89	20	34	0029	7.2	2.05	30
20	0005	7.4	1.8	29	35	0029	6.5	1.71	15
21	0006	7.3	1.94	24	36	0025	7.9	1.76	25
22	0006	7.2	1.82	21	37	0025	6.2	2.09	26
23	0006	6.6	2.03	24	38	0038	6.0	1.68	19
24	0006	7.6	2.59	46	40	0049	7.1	2.11	25
25	0007	6.5	1.68	16	41	0049	5.6	2.0	20
26	0007	5.5	1.61	13	42	0049	7.4	2.15	34
27	0007	7.1	1.53	13	43	0049	6.5	2.14	25
28	0010	6.7	1.79	21	44	0053	7.3	2.60	32
32	0029	7.6	2.11	35					

5. 包含層出土遺物

包含層からは弥生時代後期～奈良時代にかけての遺物が出土した。遺物の出土状況を見ると、弥生時代後期～古墳時代前期の遺物は調査区南側に集中している。

弥生土器 (130)

130は複合口縁壺である。調査区西側で出土した。口縁は内湾気味にくの字形に折れて内傾し、端部は面取りする。頸部は窄まりながら胴部に至る。調整は外面は縱方向のハケメ、内面は横方向のハケメである。色調は黄褐色を呈する。口径25.2cmを測る。

土師器 (131, 132)

131は移動式の竈の底である。底の上面内側には二次焼成による赤変が見られる。調整は内外面ともナデである。132は瓶の底部と考えられる。調整は外面は縱方向の平行叩き、内面は同心円文の当て具痕が残る。色調は黄橙色を呈し、細砂を多く含む。

製塙土器 (133～142)

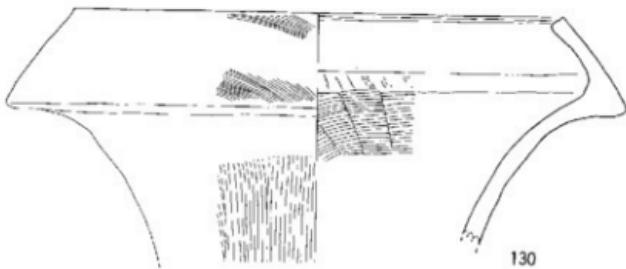
製塙土器には煎熬用 (133～141) と焼塙用 (142) のものとがある。133～135は口縁で、緩やかに外反し、端部は上方につまみ上げる。調整は外面は横方向の平行叩き、内面は円弧文の当て具痕が残る。136～138は胴部片である。細片のため、傾きは不明確である。137, 138は外面は格子目叩きを施す。内面は円弧文の当て具痕が残る。139～141は底部片である。丸底で、外面は平行叩きが交差している。内面は円弧文の当て具痕が残る。いずれも二次焼成による赤変や器面の剥落が見られる。胎土は細砂を少し含む。142は焼塙壺の底部片である。包含層からはこれ1点である。外面には指痕、内面には粗い布目が残る。色調は黄灰色を呈し、胎土は細砂を僅かに含む。

須恵器 (143～146)

143～145は坏身である。143は短く内傾する受け部がつく。底部は回転ヘラケズリである。器高3.2cm、口径10.4cmを測る。144は底部内寄りにハの字形に開く高い高台が付く。体部は直線的に立ち上がる。器高4.1cm、口径12.0cm、高台径7.0cmを測る。145は体部は直線的に立ち上がる。口径16.4cmを測る。146は底である。胸部中位には沈線が1条巡る。底部は回転ヘラケズリを施す。色調は赤褐色を呈する。底部にはヘラ記号がある。

白磁 (147～148)

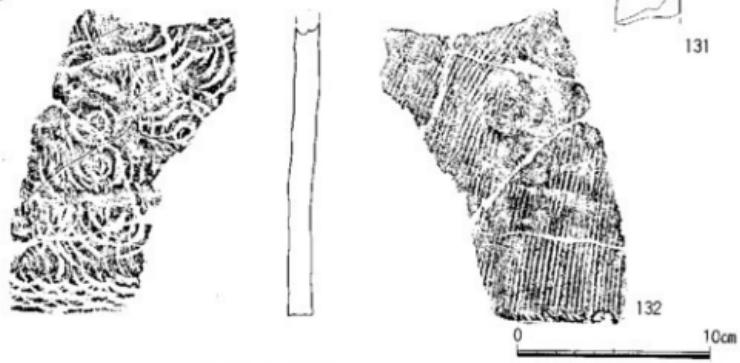
中世の遺物は少なく、これ以外にはヘラ切りの土師器小皿、黒色土器等が少量あるのみである。147は高台付皿である。外面には白堆線がある。見込みには沈線が巡る。体部下半は露胎となる。胎土は細かく、灰白色を呈する。釉色は白色を呈し、水裂が見られる。高台内側には墨痕が見られるが、判読できない。器高2.7cm、口径9.8cm、高台径4.2cmを測る。148は白磁碗V類の底部である。高く細い高台で、露胎となる。胎土は細かく、灰白色を呈する。釉色は灰



130



131



132

10cm

Fig. 28 包含层出土遗物实测图 1 (1/3)

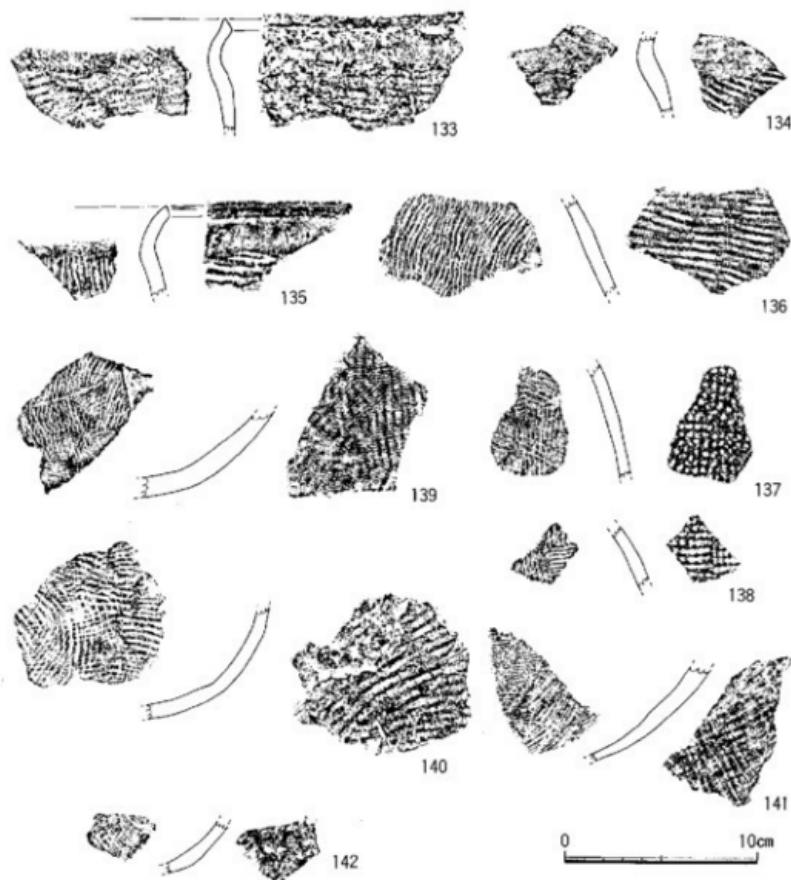


Fig. 29 包含層出土遺物実測図 2 (1/3)

白色を呈する。高台径6.2cmを測る。

瓦 (149～151)

古代の瓦と考えられるもので図化したのは3点である。軒瓦はない。これら以外は近世のものである。149～151は平瓦である。149は凸面は格子叩きの後ナデ、凹面は粗い布目である。色調は灰白色を呈する。150は凸面は大きめの格子叩き、凹面は布目をナデ消す。色調は暗灰

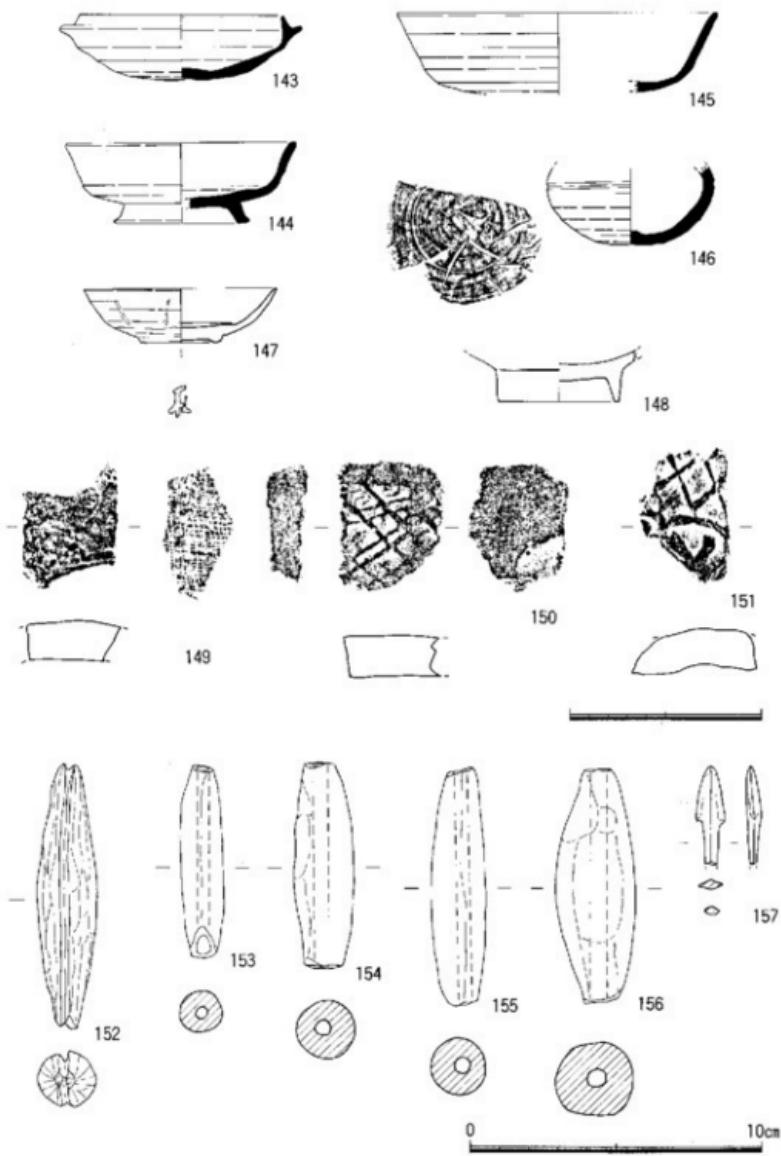


Fig. 30 包含層出土遺物実測図 3 (1/3, 1/2)

色を呈する。151は凹面は欠損している。凸面は大きめの格子叩きで、文字がある。色調は暗灰色を呈する。

石錘 (152)

石錘は調査区西側で1点出土した。152は滑石製の石錘で、紡錘形を呈する。縦方向に溝が彫り込まれる。表面には整形の際の削り痕が残る。長さ9.0cm、幅2.0cm、重さ20gを測る。弥生時代後期～古墳時代前半に位置づけられるものと考える。

土錘 (153～156)

土錘は調査区全域で出土した。紡錘形のA類は3点、円筒形のB類は38点、破片は2点出土した。A類は比較的大きめで、長さ8cm前後のものが多い。B類には大きさにばらつきがあり、6cm以下のもの、7cm前後のもの、8cm前後のものがある。

銅鑼 (157)

銅鑼は調査区西側で1点出土した。157は有茎式の鑼で、刺道は有さない。両面に明瞭な鎬がある。基部は若干欠損している。器面の風化が著しい。現存長3.3cm、幅1.0cm、厚さ0.4cmを測る。

Tab. 3 包含層出土土錘一覧表

番号	遺構	長さcm	幅cm	重さg	番号	遺構	長さcm	幅cm	重さg
45	包含層上面	7.1	1.96	28	65	包含層上面	7.4	2.18	27.5
46	包含層上面	6.6	1.45	13	66	包含層上面	6.7	1.91	27
47	包含層上面	8.2	1.87	26	67	包含層上面	6.6	2.14	25
48	包含層上面	8.1	2.70	48	68	包含層上面	7.3	2.08	25
49	包含層上面	8.9	2.55	44	69	包含層上面	7.2	2.06	22
50	包含層上面	6.6	2.31	32	70	包含層上面	7.9	2.02	22
51	包含層上面	7.9	1.9	25	71	包含層上面	6.7	1.74	19
52	包含層上面	6.9	1.94	27.5	72	包含層上面	7.0	2.43	30
53	包含層上面	7.2	1.74	21	73	包含層上面更細	7.2	1.92	22
54	包含層上面	7.3	2.05	28	74	包含層上面Ⅱ区	5.8	1.64	12.5
55	包含層上面	8.0	2.02	29	75	包含層上面Ⅲ区	7.2	1.62	20
56	包含層上面	7.5	1.81	19	76	北側包含層	6.7	2.12	27
57	包含層上面	7.1	1.94	24	77	北側包含層	6.6	1.74	18
58	包含層上面	7.5	2.07	35	78	東側トレンド	6.5	1.73	16
59	包含層上面	6.9	1.86	25	79	東側トレンド	6.4	1.65	17
60	包含層上面	6.9	2.08	28	80	東側トレンド	8.1	2.28	32
61	包含層上面	7.2	1.88	21	81	現代擾乱	7.7	1.91	25
62	包含層上面	7.3	1.95	21	82	現代擾乱	7.8	2.34	28
63	包含層上面	6.6	2.0	24	83	現代擾乱	6.8	1.94	24
64	包含層上面	7.2	1.91	21	84	現代擾乱	7.7	2.03	26

6. 駅弁と考古学

駅弁容器概説

列車の旅に駅弁は欠かせない。今日、弁当は折り箱、お茶は白のボリ容器に入るのが通例となった。だが件のボリ容器は、本来熱ものには向いていない。採算重視の産物である。

御記憶の方も多いと思うが、かつて茶瓶は素焼の同型のものだった。それ以前、箱形の茶瓶は、徳利形で、その前は急須形。今回の調査で出土した急須は、各々職能を用いて作られている。年代は大正のおわりから昭和のはじめに比定される。

明治22年（1889）博多駅が開業、最初に丸明館が駅弁に着手したが採算が合わず中止。明治29年になって運送店⑤を経営していた木永寿によって営業再開となった。駅弁経営が軌道にのるのは大正に入ってからということだ。つまり列車の旅に駅弁は欠かせないというのも、お茶の容器が手工業製品では躊躇するまいというのも、すべて今風の先入観に囚われた感覚に違いない。

小稿では、同一土壙（0301）出土の駅弁関係容器について考察を行なう。土壙は、吉塚駅が操車場であったことから察すると、「廃棄」目的に限定できる。しかも主体を占める土瓶は、蓋・瓶本体・猪口のセット関係が判り易い。生産と消費のプロセスに注目する考古学的分析に十分通じるものがある。

土瓶

出土遺物は、お茶入れの土瓶と猪口、うなぎどんぶり容器に大別できる。遺物の総量は、コンテナ80箱にのぼり、そのうち上瓶本体と蓋がおよそ9割を占める。

大川 清氏によると土瓶は、瓶本体に蓋受けのせし出しがあるものと、そうでない2タイプがあるとのことである。蓋受けの有るタイプを「キ」有り、無いタイプを「キ」無しと呼称されているので、小稿でもそれに従う。「キ」有りは「キ」無しに比べて、数段高度な技術と手間を要することである。省力化の視点によると「キ」有りから「キ」無しへ型式変化したと考えられる。

「キ」有り本体は、6個体、蓋32個体である。またセットになる高台に削りのある猪口が2個体出土している。

「キ」無しの数量計算にあたっては、破片が70箱近くに及ぶため、コンテナのままヘルスターにのせ重量を総計、コンテナの重さを差し引いて、1個体の平均重量値で割り出した。蓋も同様の方法で算出した。

「キ」無し本体は、4095個、蓋が1140個体である。蓋は本体の28%を占める。また高台に削りのない猪口は、658個で、本体の16%を占める。

また「キ」無し本体には、文字や記号のゴム印が認められるものがある。ゴム印の種類は14

通りで、588個体について確認できた。この割合は「キ」無し本体の14%にある。以下に数量順に列記する。

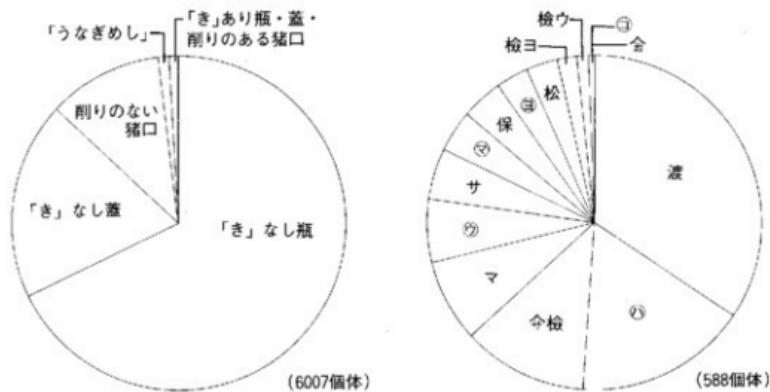
- | | | | | |
|-----------|-----------|-----------|----------|-----------|
| 1. 渡——205 | 2. ②——102 | 3. 今檢——71 | 4. マ——49 | 5. ③——35 |
| 6. サ——27 | 7. ④——24 | 8. 保——22 | 9. ⑤——17 | 10. 松——16 |
| 11. 檢ヨ——9 | 12. 檢⑥——7 | 13. ⑦——3 | 14. 金——1 | |

これらのゴム印が、産地、製造者、流通業者の何れを示すのか、今のところ断定できない。ただ博多駅65年史に有限会社「芳屋」の馬渡武夫氏に関する記述が参考となりそうなので一部抄出する。「篠栗駅長として在職中に駅売りのお茶の価格が高く、しかもその容器が九州管内は特に粗悪であることを知るや、勤務の余暇をさいて百方手をつくした結果、篠栗とその周辺に良質の陶土のあることを知り、その後起った色々至難な問題をよくのりこえ、鉄道退職者とその家族によって篠栗窯業所を起して大量生産によるコストの引下げに成功したのである。」馬渡氏が窯業事業から引退したのが昭和9年2月であるので、土壤出土遺物の時期にはほぼ相応する。「渡」は馬渡氏の一字を探ったものではないかと思う。もしそうであれば、製造者の屋号が含まれていることになる。

うなぎめし

博多駅構内営業の戦後の立売り販売品目は、弁当類（上等弁当・並弁当・すし・鰻めし・幕之内・サンドイッチ・むし寿司・かしわめし）、牛乳、アイスクリーム、果物、茶わんむし、うどん、うなぎどんぶり、とある。この中、うなぎどんぶりの販売開始の時期は知りえなかつたが、今回「うなぎめし」と書かれた蓋とセットになる碗が出土したので、以下に所見を記す。

「うなぎめし」は蓋35個、碗38個が確認されており、ほぼセットで廃棄されたと考えられる。



Tab. 4 土壤出土遺物の器種構成・「き」なし瓶のゴム印種別構成

蓋の内面には、つまみの輪郭が付着したものが見られるため、重ね焼きであることがわかる。

うなぎめしの書体については、PL14・15にあるとおり、幾つかのタイプが折りたてできる。“うなぎめし”と稚拙な平板名で書くもの、“う”と“し”的字がウナギの形状を真似たもの、さらに“字奈ぎめし”と漢字を充てるタイプなどに大別できる。

碗は、すべて高台削り出しで、高台付近を除いて透明の釉がかかる。中には内外面に緑色の斑文のみられるものがある。

次に個別の解説を行ない、製作技法上の問題にふれたいと思う。

遺物解説

「キ」有り関連の資料をFig.32図に示す。蓋と瓶は、確実なセットではなく、あくまで装着感によって配したものである。

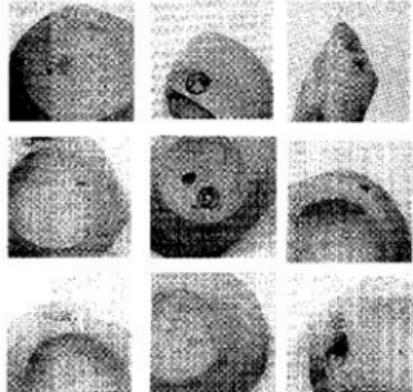


Fig. 31 「キ」無し瓶にみられるゴム印

蓋は、橢円成形で、各部も底部に回転系切り痕が観察できる。つまみは長短の二種があり、つまみを中心にして外側に釉を施している。釉の範囲は、外側全体に施す類(1・6・9)と外縁部に施釉しない類(2・5・10)とがある。

瓶注口部の内側は、一穴の類(3・4・7・11)と本来三穴であった類(8・12)がある。また肩部の把手接合部に鉄金具が付着するものがあり、もともと針金状の把手があったと考えられる。瓶の施釉については、底部を除く外側に施釉する類(4・7・8・12)と内底部まで施釉する類(3・11)がある。

釉の色は、青味がかった灰色という表現があつてはまる。瓶8は、暗緑色の釉で、「キ」の整形も他の瓶と異なる。内底部には布目跡があり、外底部の立ち上がり付近に、重ね焼きの際に付着した釉が観察できる。従って瓶8のタイプは、蓋を外した状態での重ね焼き、外縁部に施釉しない蓋は、蓋をした状態での焼成も可能であろう。

手間を省く——省力化という点で、「キ」有り瓶から「キ」無し瓶への型式変化を理解するなら、セットとなる猪口は、高台に削りのあるタイプが想定できよう。

以上「キ」有り関連の所見を述べたが、「キ」有りの多くが完形品かほぼ完形に近い遺存状況である点に留意すべきであろう。

次に「キ」無し関連の資料について説明を行なう(Fig.33・34図15~34)。「キ」無し瓶は、4095個体が算定されているにも拘らず、完形あるいは完形に近い瓶は、ここに図化した7点の

みである。「キ」無し瓶の主要器種は、肌色の胎土に透明釉を施したタイプ(17・18・21・22)で、25・28は、灰色の胎土に淡い緑灰色の釉を施している。また26は、赤褐色の胎土に褐釉を付すタイプであり、24の蓋とのセットが予想される。24と同型式の蓋は他に一点認められる。17・18の瓶の肩部には鋳化した金具が付着していることから針金状の把手を有していたと考えられる。また施釉の範囲は、17・18・21・22の瓶では、蓋受部を除く内面と外面の肩部から胴部中位にかけてである。25・26・28は外面のみ施釉している。また注口部は、すべて一穴である。

蓋は何れも底部に回転糸切りの痕がある。施釉は、24が外面から縁にかけて、20が無釉であるのを除くと、他は、瓶の蓋受けに接さない範囲で、内面に釉を施している。

「キ」無し瓶は、蓋を付けた状態での重ね焼きも可能である。

セットとなる猪口は、29~34までの6点を図化したが、高台部を削り出さないという共通点を除くと、釉調や器形にかなりバリエーションが認められる。

さいごに「うなぎめし」容器について、Fig.34・35の35~54までの蓋と碗の個別のセット関係は明らかではない。

とくに蓋は「うなぎめし」の書体による分類も可能と思われる。蓋は外面と井の湯気のつく部分に施釉されている。44・47の蓋内面を除いて、重ね焼きに際して付着したつまみの痕が観察できる。また43の蓋は、縁部に棒状の工具を刺して穿孔している。

小 結

これまで駅弁関係の「土瓶」と「うなぎめし」について記してきたが、製作と消費にかかる問題を整理しておきたい。

まずこれらが使い捨て容器だったかである。「キ」有り土瓶のなかには、注口付け根部に3つの穴を穿つタイプ2例が含まれている。これは、土瓶本体にお茶の葉を入れ、さらにお湯を注いだと推定される。その他の「キ」有り及び「キ」無し瓶の注口接合部の穴は、すべて一穴であり、大きな湯わかしに入ったお茶の注ぎ分け容器である。

これらは数度の使用に耐えうるものだが、駅での立売りという性格上、列車内で消費されたものの回収は面倒であろう。これは「うなぎめし」の井についても同様である。

つぎに数量からみた廃棄の性格について。

「キ」有りは、6個体で蓋が32個体、この蓋は、「キ」無しの瓶には使えないで、数字のうえではセットは成立しない。「キ」無しについても、瓶本体に対し、蓋は28%、猪口は16%であり、セット関係は「キ」無しも成立ないのである。

それでは、廃棄の契機は何であろう。土瓶は、欠損したものを主体としているようであるこ

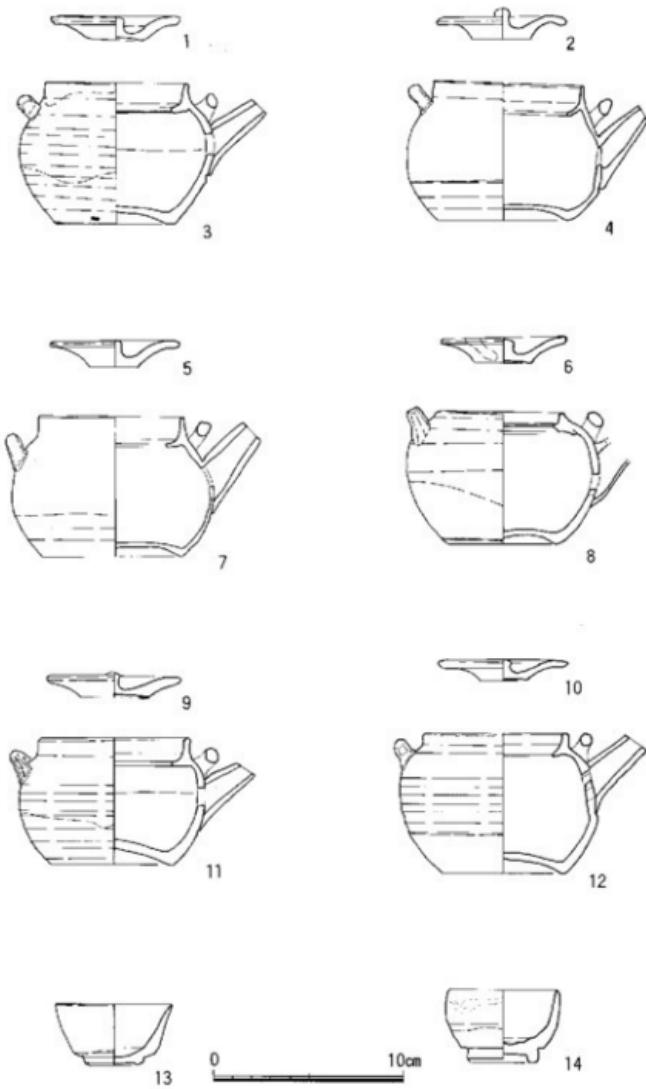


Fig. 32 駅弁関係容器 1 (1/3)

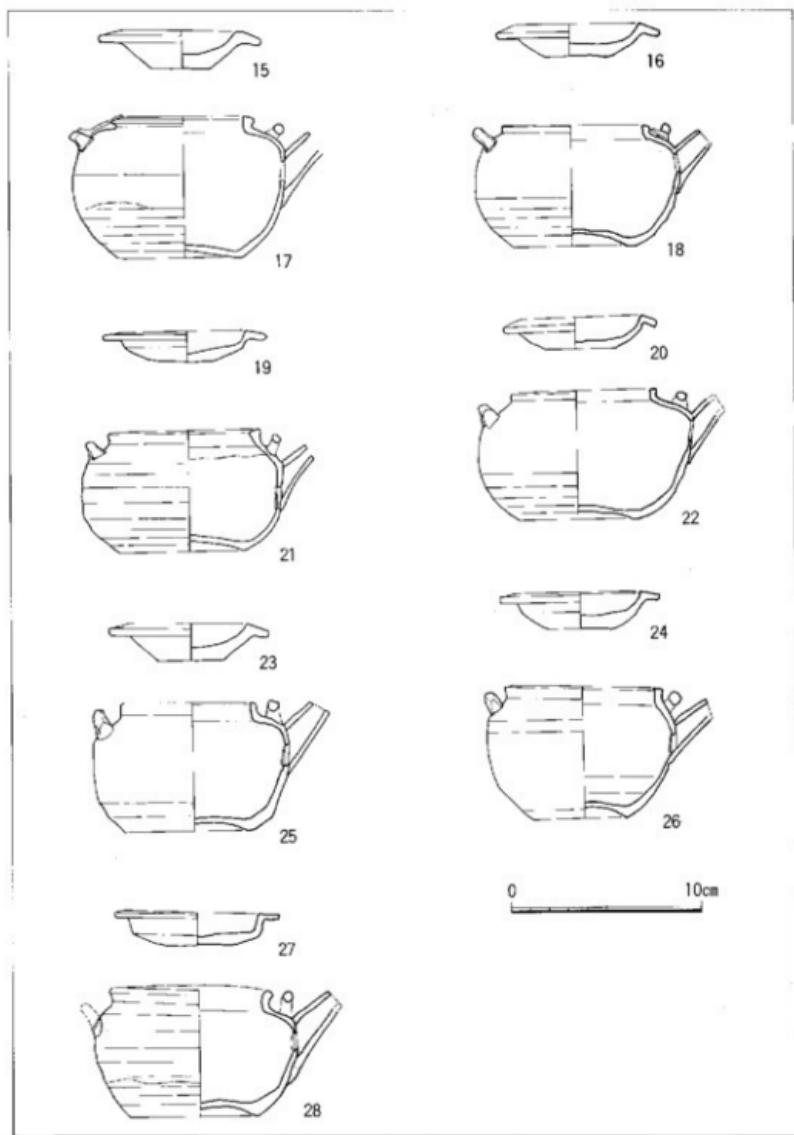
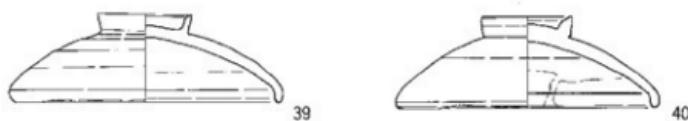
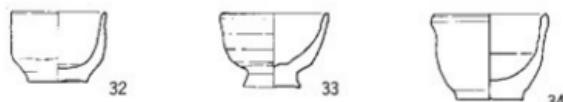


Fig. 33 駅弁関係容器 2 (1/3)



0 10cm

Fig. 34 駅弁関係容器 3 (1/3)

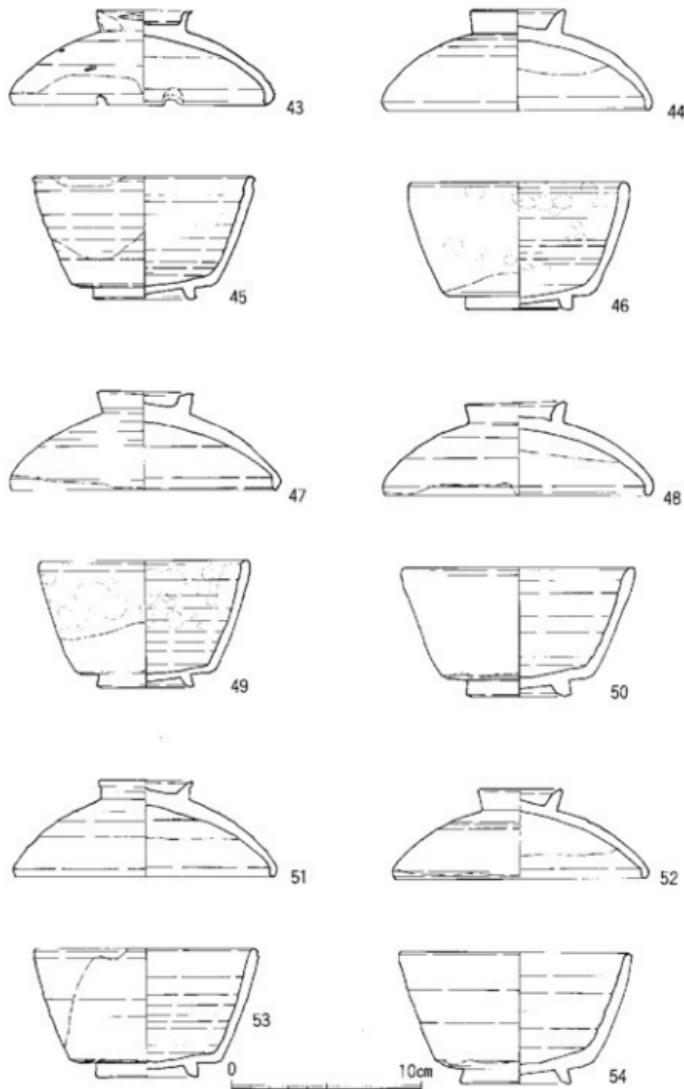


Fig. 35 駅弁関係容器 4 (1/3)

とから、パーセントは、瓶を100とした場合の蓋と猪口の破損、代替の比率を象徴しているのではないか。つまり薄づくりの瓶に比べ、蓋や猪口は破損の確立は低いと考えられるからだ。しかも猪口は、瓶の形状が、徳利形あるいは箱形と変わってもセットになりうる。

さらに完形に近い瓶は、胎土や釉薬が異質である点に注目すべきである。つまり瓶の99%以上は、肌色の胎土に透明釉を施した製品であり、その多くは破片である。この破片となったタイプが、鹿児島本線一定区間内の規格品とすると、土壤に投棄された瓶は、別の路線からの混入品（完形に近いもの）と使用に耐えなくなった規格品と推定される。

以上から、鹿児島本線の区間内で、駅間の連携による容器回収が行なわれていたとの結論に至った。半世紀余り前の状況を器種構成をもとに考察した次第である。

また駅弁関連遺物については、この他に見えない容器——折り箱の存在を含めた生産・流通・回収を把握すべきであろう。

今回分析した資料は、大正末から昭和のはじめに比定されるという。型式細分や窯跡については言及できなかったが、様々な観点から再分析が可能と考えている。以上の消費にかかるストーリーは、文献資料との付き合わせは行なっておらず、ひろく御教示、御叱正を乞うものである。文末になったが、資料収集や出土遺物について御教示いただいた諸氏、諸先生方に御礼申上げたい。

石山 熊・井上裕弘・大川 清・首藤卓茂・日高正幸（五十音順・敬称略）

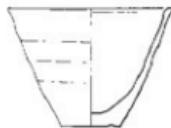


Fig. 36 「チャイ」の容器 (1/3)

参考引用文献

井上裕弘・日高正幸「吉塚本町遺跡」『福岡県文化財調査報告書第97集』、福岡県教育委員会、1992年。
博多駅「博多駅六十五年史」1955年。

兵庫県教育委員会「神戸ハーバーランド遺跡」『兵庫県文化財調査報告書第52冊』、1987年。

追記

駅売りの容器について、同僚の池田祐司氏が1988年1月、旅行先のインドから持ち帰ったチャイのカップがあるので紹介する。チャイとは砂糖入りのミルクティのことで、デリー～カルカッタかポンペイ～プーナ間の列車内で1ルピーか2ルピー（10円程度）であったという。チャイ売りの男性が、チャイの入った薬罐とカップの詰まったバケツを抱えて「チャイー、チャイ、チャイ、チャイ」と言いながら売り歩くという。容器は使い捨てで、駅のプラットホームや線路際に投げ棄てられていたということだ。素焼きで、底部に回転糸切り痕がある。駅売りの消費の一例である。

第4章　まとめ

今回の調査では弥生時代～奈良時代を主体とした遺構、遺跡を検出した。調査地点には昭和40年前後まで吉塚操車場があったため、当時の施設の基礎、ゴミ穴等でかなり搅乱をうけている。昭和30年頃の操車場の施設配置図をみると、この場所には引き込み線が存在していたことが分かる。調査地点南側のコンクリート基礎はその倉庫のものと考えられる。それでは時期毎の遺跡の概要を述べていく。

弥生時代

今回の調査ではこの時期の遺構は明確には検出できなかった。遺物は調査区西側で集中して見られた。東側で行われた第3次調査では当該期の遺構、遺物は見られないため、当該期の遺構は本調査区西側から更に周辺に広がるものと考えられる。遺物は概ね弥生時代後期に位置づけられるもので、弥生土器には複合口縁壺、甕等がある。このほか、有茎式の銅鏡、滑石製の石錘等が出土した。

古墳時代、奈良時代

古墳時代の遺構は大きく2期に分けられる。1期は古墳時代前半で調査区西側を中心に遺構、遺物を検出した。SC0201は布留式古段階に位置づけられる堅穴住居跡である。これ以外この時期の遺構はほとんど見られず、弥生時代と同様、遺構、遺物は西側に更に広がるものと考えられる。

2期は6世紀末以降で、この時期の遺構には堅穴住居跡、土坑等が見られる。これらの遺構は8世紀後半まで見られる。堅穴住居跡は5軒検出したが、主柱穴が明確なものはなかった。また、炉、竈等の屋内施設も検出できなかった。ただ、竈については移動式の竈が出土している。堅穴住居跡はいずれも方形、隅丸方形のプランで、1辺4～5mのものである。住居はいずれも調査区東側に分布する。上坑は長方形、楕円形のプランのものがある。また、調査区中央で2×2間の縦柱建物を検出した。

遺物には須恵器、土師器、製塙土器、土錘、瓦等がある。製塙土器は堅穴住居跡、土坑の埋土から出土したが、炭、灰などが多量に出土するという事は無かった。製塙土器には煎熬用と焼塙用がある。今回の調査では量的には焼塙用土器は2点で、他は煎熬用である。

平安時代

この時期の遺構は少ない。遺物には越州窯系青磁、中国製白磁、黒色土器等がある。

遺跡の主な時期は6世紀末～8世紀後半で、遺構、出土遺物等から主に漁労活動に依存した集落であったと考えられる。

図 版



駅弁関係遺物 (0301)



1. 第2次、3次調査地点遠景（南から）



2. 第1次調査地点全景（北から）



1. 第1次調査地点Ⅰ区北側全景（東から）



2. 第1次調査地点Ⅰ区南側全景（東から）



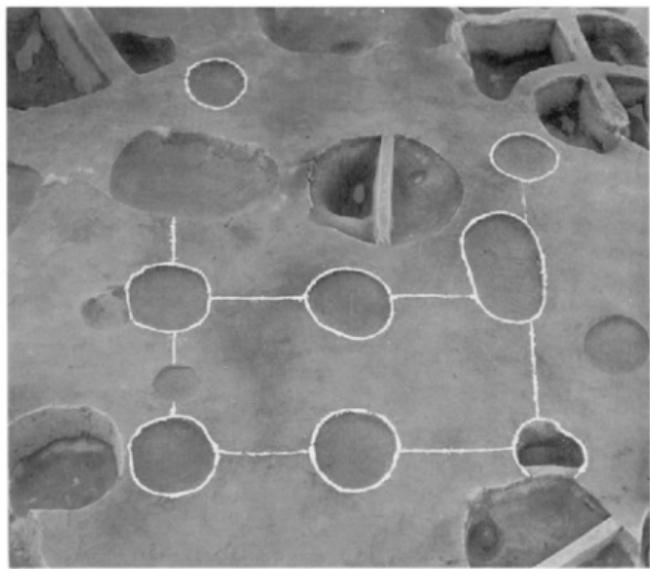
1. 第1次調査地点Ⅱ区全景（北から）



2. 第1次調査地点Ⅱ区全景（南から）



1. 作業風景（東から）



2. SB-0111完掘（東から）



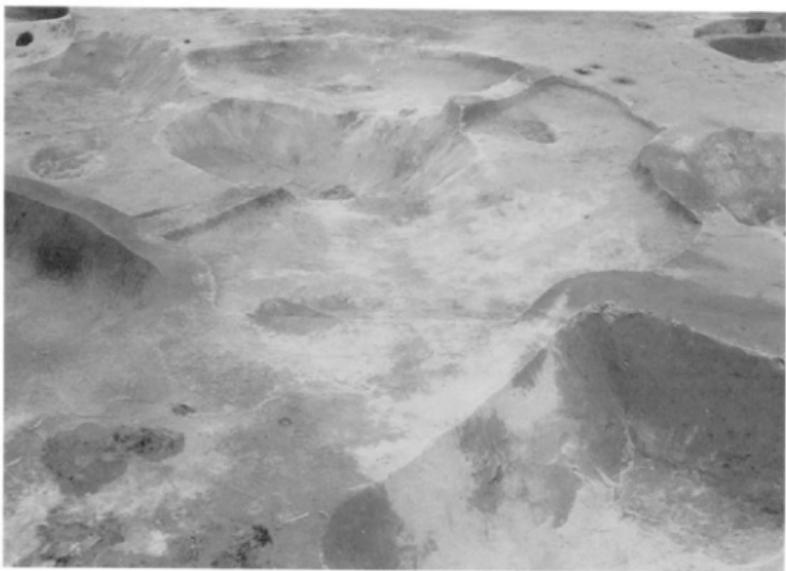
1. SC-0001, 0024, SK-0002完掘（東から）



2. SC-0001完掘（南から）



1. SC-0024、SK-0002完掘（東から）



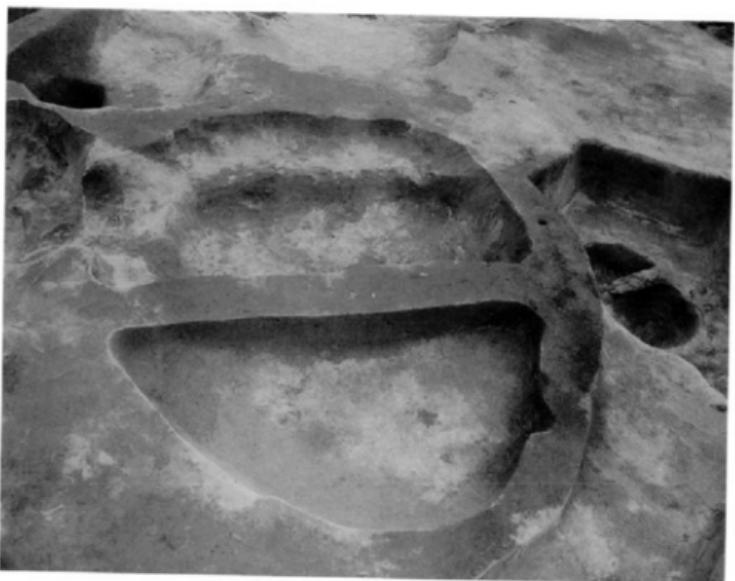
2. SC-0039完掘（北から）



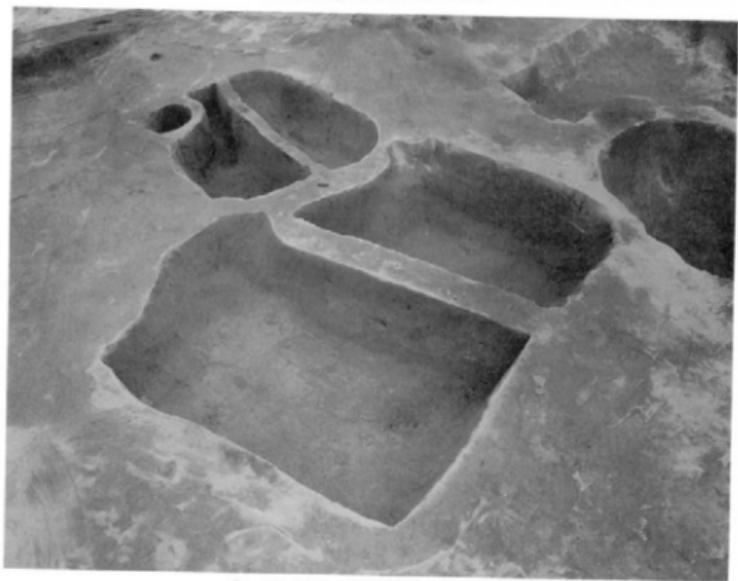
1. SC-0041完掘（北から）



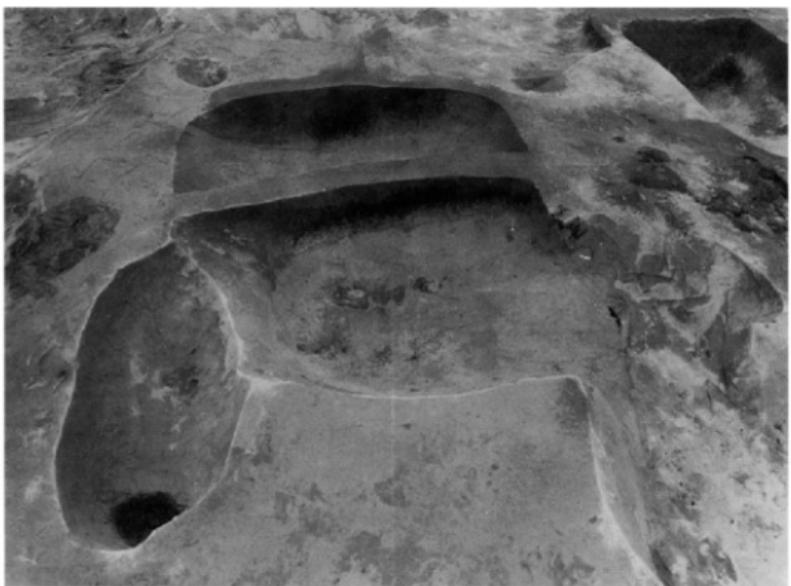
2. SK-0003完掘（西から）



1. SK-0005完掘（西から）



2. SK-0006、0007完掘（西から）



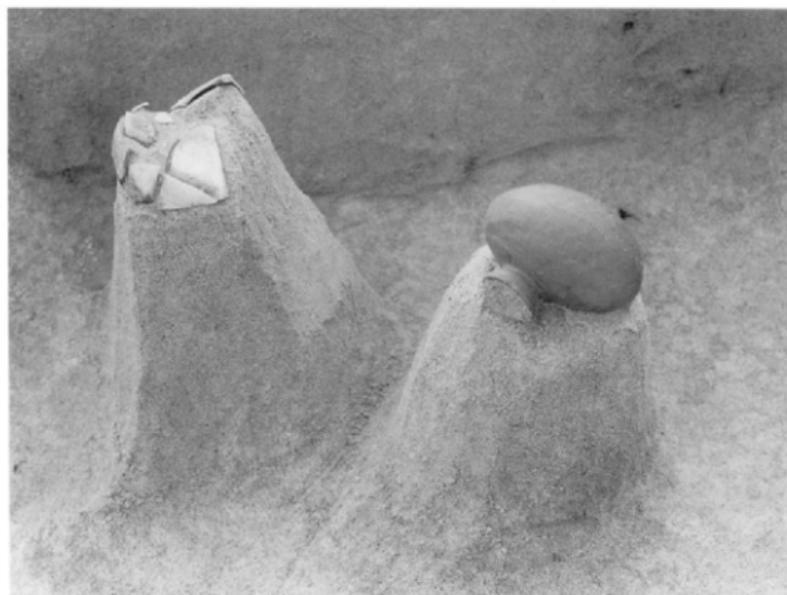
1. SK-0025完掘（東から）



2. SK-0040完掘（東から）



1. SK-0055完掘（東から）



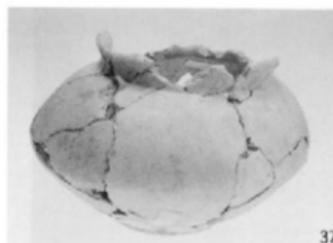
2. SK-0055遺物出土状況（東から）



1. II区西側包含層出土銅鏡（南から）



2. II区駁并用茶瓶廃棄坑（南から）



37



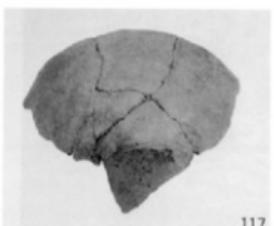
39



130



131

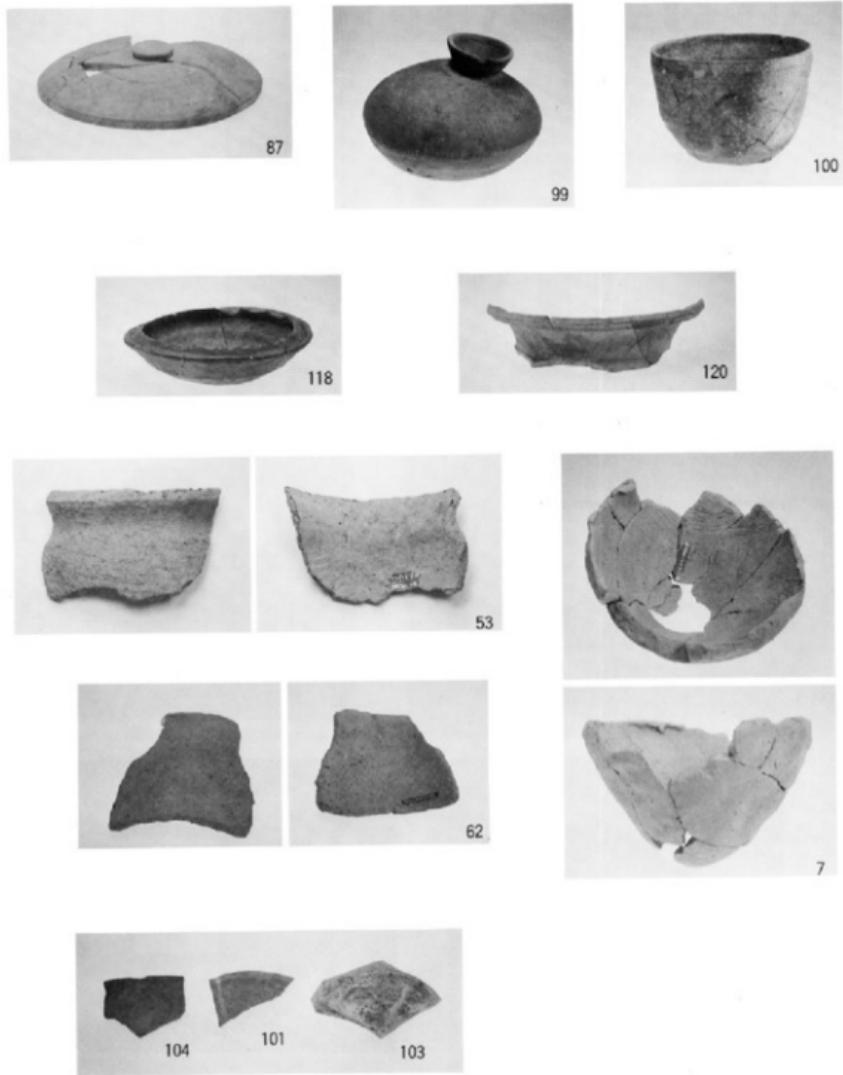


117



132

1. 出土遺物 弥生土器・土師器



1. 出土遺物 須恵器・製塙土器・陶磁器



40



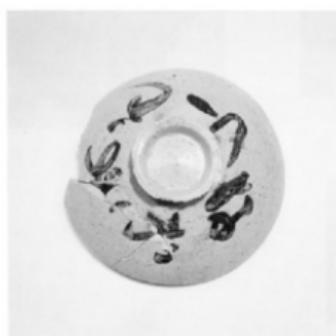
152



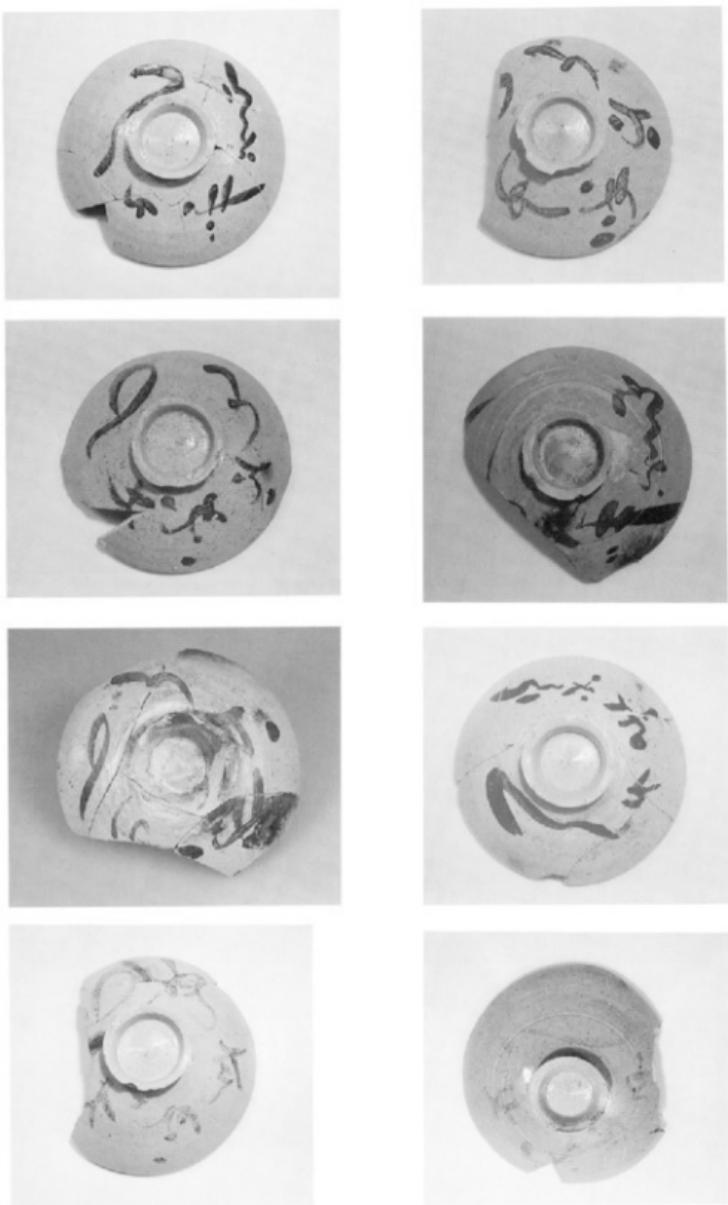
157



一分銀粘土錘



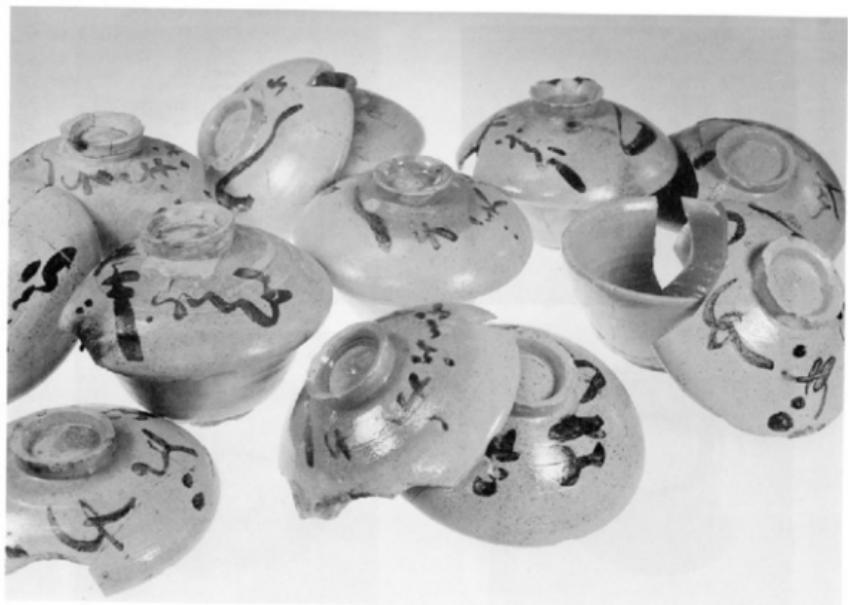
1. 出土遺物 石錘・土錘・銅鑼・駅弁関係



1. 出土遺物 駅弁関係



1. 出土遺物 駅弁関係



2. 出土遺物 駅弁関係

吉塚本町遺跡1

—吉塚本町遺跡第1次調査報告書—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第319集

1993年3月15日

発 行 福岡市教育委員会
〒810 福岡市中央区天神1丁目8の1

印 刷 祥文社印刷株式会社